

近代日本版画家名覧（稿）

（1900－1945）

〈凡 例〉

- 1、作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。
- 2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外は一般的と思われる読みを採用した。
- 3、年記は西暦を基本として、生没年については（ ）内に元号を表記した。
- 4、作品名は《 》、書籍・雑誌・作品集などは『 』内に表記した。〔 〕内は執筆者補記を示す。
- 5、版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。
- 6、頻出する参考文献については以下のように表記する。
 - ・加治幸子編著『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版 2008年）→『創作版画誌の系譜』
 - ・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版 1991年）→『エッチング』
- 7、執筆者
岩切信一郎（新渡戸文化短期大学教授） 植野比佐見（和歌山県立近代美術館学芸員）
加治幸子（元東京都美術館図書室司書） 滝沢恭司（町田市立国際版画美術館学芸員）
三木哲夫（兵庫陶芸美術館館長） 森 登（学藝書院）
樋口良一（版画堂店主）
- 8、『版画家名覧』は、版画堂のホームページ <http://www.hanga-do.com/> でもご覧いただけます。

戦前に版画を制作した作家たち (2)

伊倉 義雄 (いくら・よしお)

1923 (大正 12) 年 5 月の日本創作版画協会第 5 回展に木版画《朝の光》を出品。当時の住所は新潟。また、1926 年 11 月刊行の『HANGA』第 11 輯 (神戸・版画の家) に木版画《岩船の河口》を発表している。なお、編著に『大瓠遺稿』(大瓠伊倉寛著 1930 未見) がある。【文献】三木哲夫「[資料] 日本創作版画協会資料総出品目録」『和歌山県立近代美術館紀要 第 2 号』(和歌山県立近代美術館 1997) / 『創作版画誌の系譜』(三木)

飯田 武 (いいた・たけし)

アナーキズム文芸雑誌『野獣群』同人の有泉譲、阿部貞夫、横井弘三らが『野獣群』の「美術号」として創刊した『構成派 1』(野獣群出版部 1926.10) にリノカット《インターセクション》を発表。【文献】『倉敷市美術館 1994 年版』 / 『創作版画の系譜』(樋口)

飯田恒夫 (いいた・つねお)

1929 (昭和 4) 年 1 月創刊と考えられている創作版画誌『爆竹』編集同人で、第 4 号 (1929.10) に《或邸街風景》、第 5 号 (1930.1) に《午後の魚河岸》、第 6 号 (1930.3) に《琉球の壺》、第 7 号 (1930.5) に《S 女像》(各木版画) を発表。また、1931 年 9 月の日本版画協会第 1 回展にも木版画《伊豆のバス》を出品した。【文献】『日本版画協会第一回展出品目録』 / 『創作版画誌の系譜』(三木)

飯田艇三 (いいた・ていぞう) 1914 ~ 1992

1914 (大正 3) 年 4 月 7 日茨城県龍ヶ崎に生まれる。本名は秀男。東京高等工芸学校卒業 (卒業年末調査)。1941 年の第 28 回二科展に彫刻《習作ノ首》が初入選。その後中断があり、1946 年の第 21 回展から再び彫刻部に出品するようになり、1982 年の第 57 回展まで連続して出品。その間、1947 年の第 22 回で特待賞を受賞し、1954 年の第 39 回展で彫刻部会友に、1959 年の第 44 回展で彫刻部会員に推挙されている。版画は 1943 年の日本版画協会第 12 回展 (目録では艇三) に木版画《庭 其一》《庭 其二》が入選し、戦争による中断をはさんで 1949 年の第 17 回展まで連続して出品。第 17 回展の出品作《風景》《首と花》は孔版だった。1992 (平成 4) 年 5 月 30 日茨城県取手市で逝去。【文献】「日本版画協会展目録」 / 「自筆履歴書」(二科会蔵) (三木)

飯田輝夫 (いいた・てるお)

青森師範在学時代に今純三の指導を受け、1931 年江渡益太郎が中心になって結成した「青師版画研究会」に参加。機関誌『刀の跡』に作品を寄せるが、2 号で廃刊となる。【文献】江渡益太郎『青森県版画教育覚え書』(津軽書房 1979) (樋口)

飯田比佐志 (いいた・ひさし)

東京で発行されたプロレタリア美術系の版画誌『爆竹』第 3 号 (1929) に《裸婦》を発表する。この情報は『爆竹』第 4 号 (1929.10) の田中比左良による「第 3 号を見て」からのものであり、田中の文章によると「もう少し裸体を凝視する必要がある。だが顔はいい。この人はいつも

の作より劣ってゐる。……」と書かれている。『爆竹』の第 1 ~ 3 号は現在のところ確認されておらず、これらの号が確認されれば、飯田の作品についても明確となる。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

飯田文一 (いいた・ぶんいち)

1938 年当時、富山県富山中学校に教諭として勤務。その数年前からエッチングに興味を覚え、指導書をもとに独習するものの、実地に指導を受けることの必要性を感じていた。1938 年 8 月富山県富山中学校において日本エッチング研究所巡回夏期講習会が講師西田武雄らで開かれた。その講習会 (『エッチング』71 号 1983.9) に参加し、「エッチングの講習を受くるの記」として西田武雄発行の『エッチング』第 70 号 (1938.8) に作品と共に寄稿。また第 76 号 (1939.2) にも銅版画《風景》を発表した。【文献】『エッチング』(加治)

飯野農夫也 (いいの・のぶや) 1913 ~ 2006

1913 (大正 2) 年 7 月 23 日茨城県真壁郡五所村に生まれる。1927 年栃木県立真岡中学校に入学。文学と美術にひかれ、翌年より油絵を描き始め、1930 年清水登之の指導を受ける。1931 年同校を卒業し、上京。プロレタリア美術研究所に入り、鈴木賢二を知る。同期に大田耕士、新居広治らがいた。またこの年、プロレタリア美術家同盟員になる。1932 年『プロレタリア文学』の挿絵を描き、美術記者をかねる。1933 年徴兵検査のために帰郷。翌年再び上京するも、1935 年帰郷。版画は、1937 年に鈴木賢二の勧めで始め、1940 年造型版画協会第 4 回展に木版画《麦刈り》《糸とり》を出品。翌年の第 5 回展にも《警防の男》など 4 点を出品し、会友に推挙され、1943 年の第 7 回展まで連続して出品した。戦後は、1939 年から勤めていた下館郵便局を辞し、1945 年に五所村役場書記となるも、1946 年に農民組合を作り、書記を解かれる。この年、久保貞次郎、鈴木賢二、新居広治らと日本美術会北関東支部を作り、事務局書記を担当。日立・水戸・高萩での職場移動展や、宇都宮で公募展 (1947) を開催した。翌 1947 年に鈴木賢二、滝平二郎らと「刻画会」を結成し、機関紙『刻画』を刊行。また、中日文化研究所の中国木刻展の開催、茨城県久慈郡太子町での「全日本新木刻運動会議」の開催、日本新版画懇話会 (1948) の結成準備などに尽力するとともに、「奥久慈版画会」(太子町) を結成し、指導者として版画の普及に尽くす。1948 年には中日版画展 (主催: 朝日新聞社) と日本アンデパンダン第 2 回展に出品。日本アンデパンダン展には、以後、1963 年の 16 回展まで断続的に出品した。その他、旺玄会展 (1951・52)、造型版画小品展 (1955)、版画懇話会の「現代版画展」(1955・59)、ソ連巡回の「現代日本版画展」(1961) などにも出品したが、1962 年以降は個展での発表が中心となり、晩年まで旺盛な制作意欲を示した。その作品の世界は、自ら「版画の百姓」「野良の美術家」と名乗ったように、農村の風景や農民の生活・風貌を独自の視点で捉えたものであった。版画集に『飯野農夫也版画集』(風書房 1974)、詩集に『やぶれた花』(二人社 1958) と『かなしき春』(未見)、版画と詩をまとめたものに『飯野農夫也作品集』(社団法人家の光協会 1976) などがあり、また『常総文学』第 9 号 (1977.12) には「飯野農夫也特集」が収録されている。2006 (平成 18) 年 1 月 28 日茨城県下館市で逝去。【文献】『飯野農夫也作品集』(社団法人家の光協会 1976) / 『野に叫ぶ

人々―北関東の戦後版画運動』図録（栃木県立美術館 2000） / 『飯野農夫也版画展』図録（筑波銀行 2011） / 『資料集 野に叫ぶ 飯野農夫也と奥久慈版画会―戦後復興と地方からの文化発信―』（飯野農夫也画業保存会 2012）（三木）

伊賀町男（いが・まちお）

『白と黒 第1次』第11号（1931.2）に《昼の幻想》を発表する。『白と黒』は料治熊太が発行した版画誌の中の1誌で、自画自刻自摺を基本としており、再刊（第2次）、第3次を併せると全59号（1930～1937）にも及ぶ大規模な刊行となった。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

猪飼俊一（いかい・しゅんいち）

東京美術学校日本画科在学中、3年学年の時（1937）に、高田（浜田）知明らと共に東京美術学校臨時版画教室エッチング部に所属。また当時先鋭的な活動を展開していた日本画家・小林源太郎の影響で一級先輩の池澤賢、石田一郎らが結成した日本画家集団「成層絵画研究集団」（通常「成層」）に参加。「磁座」「新浪漫派」などの絵画グループ同人でもある。【文献】『エッチング』57（1937.7） / 『グループ〈貌〉とその時代』図録（郡山市立美術館 2000） / 『昭和期美術展覧会の研究・戦前篇』（東京文化財研究所 2009）（樋口）

伊上凡骨（いがみ・ぼんこつ） 1875～1933

近代彫師の鬼才。1907年に「版画趣味」を提唱し、率先して近代出版の中に複製木版の領域を築いた。鉛筆の線のかすれを表現するような「サビ彫」を開発し得意とした。雑誌『明星』、白馬会機関誌『光風』での挿入画（木版）、『白樺』表紙（木版）での活躍が知られる。単行本装丁や挿絵等も工房を持って活動。1875（明治8）年5月21日、徳島市に生まれた。本名純蔵。1891年上京し、師匠は大倉半兵衛（二代）。与謝野鐵幹が「凡骨」と命名。「パンの会」常連メンバー。摺師・西村熊吉とのコンビでの仕事知られる。石井柏亭画『東京十二景』シリーズ（1910～）の9点、未醒、鶴三等との『日本風景版画』全10集（中島重太郎主催風景版画会 1917～1920）刊行等多くの仕事がある。後継者として養子となった伊上次郎（凡骨二代目）がいる。1933（昭和8）年1月29日逝去。【参考文献】岩切信一郎『伊上凡骨』『風信』1（審美社 1988.7） / 盛厚三『木版彫刻師伊上凡骨』（徳島県文化振興財団ここのは文庫 2011）（岩切）

五十嵐禎夫（いがらし・さだお）

明治末から大正初めにかけて発行の文芸雑誌『モザイク』同人で、小林源太郎、水島爾保布らが結成した日本画家の団体「行樹社」の第1回展（1912.11.1～7）にエッチング作品を出品する。【文献】『美術週報』12-2（美術新報社 1923.1） / 『日本近代文学大辞典・第5巻』（講談社 1977） / 『昭和期美術展覧会の研究・戦前篇』（東京文化財研究所 2009）（樋口）

五十嵐幹雄（いがらし・みきお） 1919～没年不明

1919（大正8）年長野県和村海善寺（現・東部町）に生まれる。1939年、長野県師範学校（現・信州大学教育学部）卒業後、下伊那郡神稲小学校（現・豊丘南小学校）の教諭となる。その後、丸子小学校に転勤。1949年には東京大学考古学教室へ内地留学。翌年、上田市立第二中

学校教諭となり、その後も転勤を重ね、1978年上田市立川辺小学校校長を最後に退職。長野県師範学校1部5年に在学中、生徒が発行した版画誌『樹氷』第1号2598年版（1938）に《街》を発表する。【文献】五十嵐幹雄『上田・小県地方の「地字略考」』（私家版 1996）（加治）

井川洗厩（いがわ・せんがい） 1876～1961

1876（明治9）年岐阜県に生まれる。富岡永洗門下、1901年から、主に関西系版元からの単行本口絵（木版多色摺）版下を大正初期まで描く。1906年都新聞に入社し挿絵を担当（『都新聞』との関係が根強い）、同期入社の中里介山と親交を結び介山小説の挿絵をはじめ、他に雑誌や単行本の挿絵も手掛け、明治・大正・昭和にわたる挿絵の仕事の形跡がある。版画は《新浮世絵美人合・八月・月》（大判錦絵、村上版 1924）、『大正震災画集』（絵巻研究会 1926）に《電車線路上の避難》《花柳街の惨状》《夜警団》《浅草観音堂裏の避難》の4点、支那事变版画第三編《千人針》（1937）、同シリーズと思われる《我海軍荒鷲隊の肉弾二勇士 矢野一等航空兵曹 親美野三等航空兵曹》（1938頃 思成堂版）などが知られる。1961（昭和36）年逝去。【文献】『大正震災画集』 / 『近代美人版画全集』（阿部出版 2000） / 『日本の版画 1931-1940』図録（千葉市美術館 2004）（岩切）

井口欣二（いぐち・きんじ）

台南師範学校に在学中、山本磯一教諭の指導によりエッチングの制作を始め、西田武雄が発行した『エッチング』第15号（1934.1）に銅版画（題名不詳）を発表する。【文献】『エッチング』（加治）

井口良一（いぐち・りょういち） 1885～1944

1885（明治18）年5月29日岐阜県恵那郡三濃村に生まれる。近代日本がはじめて遭遇した巨大地震の濃尾大地震（1891）に被災し、長野県松本に移住。1900年、松本中学に入学するが、2学年で中退。翌年、東京の白馬会溜池洋画研究所に入り、錦城中学に学ぶ。1906年母親の死去により研究所を退所、松本の父親経営の旅館養老館にもどる。1922年養老館廃業。翌年から松本第二中学校の嘱託教諭となるが、1941年に辞して松本商業学校の嘱託教諭となる。この間松本美術会創立会員となり、1937年10月、松本市松本商業学校において開催されたエッチング講習会（講師：西田武雄）に参加し、制作した銅版画が『エッチング』第61号（1937.11）に掲載される。日本山岳会会員及び信濃山岳会幹部会員。1944（昭和19）年10月1日逝去。【文献】「井口良一略年譜」（上条武編著『高山絵紀行』銀河書房 1984 196-197頁） / 『エッチング』（加治）

池上重雄（いけがみ・しげお）

挿絵画家・多田北島主宰の作家と印刷者の協同団体である「実用版画美術協会」同人。同団体は、1929年12月7日から12日まで上野・松坂屋で実用版画美術展を開催。ポスター、雑誌、装丁、その他各種版画形式等の実用版画を陳列した。【文献】『美術新論』第5巻第1号（美術新論社 1930.1） / インターネット「実用版画協会」検索（樋口）

池上秀敏（いけがみ・しゅうほ） 1874～1944

1874（明治7）年10月11日長野県高遠に生れる。父

は四條派画家の池上秀華。1889年上京し、荒木寛敏に師事。1908年から文展に入選を重ね、1916年から3年連続で特選となる。その後帝展、新文展と出品を続ける。花鳥画、山水画を得意とし、「伝神洞」画塾を主宰し、後身の育成に尽くす。1944（昭和19）年5月26日東京下谷で逝去。版画は下村観山、松岡映丘ら82名が各場面を1図ずつ担当し赤穂義士の事跡をまとめた豪華木版画集『義士大観』（1921年出版 義士会出版部 限定300部）に《伊藤仁斎と大石内蔵助》1図を残す。【文献】『20世紀物故日本画家辞典』（美術年鑑社 1998）（岩切）

池上もと（いけがみ・もと）

武井武雄主宰「榛の会」第8回（1942.1）に橋本興家の推薦で会員となり、第11回（1945.1）まで連続参加。当時神田区神保町在住で、第9回の感想葉書には、郵便で封筒に入れられて送られて来る榛の会の賀状を、「家の者が大変楽しみにして玄関まで鉢を持って郵便を受け取りに行く」と記している。【文献】第8回～10回「榛の会」会員名簿（1942～1944）/市道和豊『奇跡の成立』榛の会・昭和21年（室町書房 2008.4）（樋口）

池田 勇（いけだ・いさむ）

愛知県半田の教師仲間による版画団体「版刀会」が発行した版画誌『運』第5号〔1931〕に木版画（題名不詳）を発表する。現在『運』は5～7、10号（1931～1935）のみを確認。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

池田永治（いけだ・えいじ） 1889～1950

1889（明治22）年10月15日京都市三条木屋町に生まれる。1928年より雅号を「永一治」（えいじ）と改める。大阪で育ち、少年期より家業の木版業（木口木版か）の修行をする。1906年地元の高等小学校を卒業。父の知り合いの印刷会社に見習いとして勤められた後、『中学世界』『ハガキ文学』『文章世界』にコマ絵を投稿し、常連となる。1909年画家を目指し、上京。翌年太平洋画会研究所で油絵を学び、同年の第4回文展に初入選。翌1911年太平洋画会会員となり、以後同展を中心に、文展、帝展、新文展（無鑑査・招待）、戦後の日展（1947年まで）などに出品し、1935年には太平洋美術学校教授となっている。また、挿絵・漫画・俳画も能くし、1912年より『文章世界』、翌年より『中学世界』の挿絵を担当。1915年の「東京漫画会」、1923年の「日本漫画会」、1932年の「新漫画派集団」の結成に関与し、『東京パック』（第3次・第4次 1920～1938）、『アサヒグラフ』（1928～1930）、『読売新聞』及び日曜付録「読売サンデー漫画」（1931～1933）などに漫画作品を発表。『新理念 俳画の技法』（芸術学院出版部 1941）の著書もある。版画は、1914年2月の『現代の洋画』第23号（版画号）の挿画として自画・自刻の木版画《早春》を発表しているが、他の作品は未見。翌1915年には、『現代俳画集 春の部』（俳画堂）に中村不折、石井柏亭らと「俳画—漫画を木版に付したるもの」（『美術新報』14—11）を発表しているようである。1950（昭和25）年12月30日、次女の住む富山県氷見郡阿尾村（現・氷見市）で逝去。【文献】『池田永治の世界—花袋著書の装幀を軸に—』（館林市教育委員会文化振興課 1998）（三木）

池田木一（いけだ・きいち）

多田北島主宰の作家と印刷者の協同団体である「実用

版画美術協会」作家側同人。同団体は、1929年12月7日から12日まで上野・松坂屋で実用版画美術展を開催。ポスター、雑誌、装丁、その他各種版画形式等の実用版画を陳列した。ブルーノ・タウト『日本文化私観』（明治書房 1926）や中野英次郎『アラビア紀行』（明治書房 1926）などの装丁も手掛ける。【文献】『美術新論』第5-1（美術新論社 1930.1）/インターネット「実用版画協会」検索（樋口）

池田桂仙（いけだ・けいせん） 1863～1931

1863（文久3）年9月2日、現在の三重県津市に生れる。本名、勝次郎。母は斎藤拙堂の娘。父（南画家・池田雲樵）の指導を受ける。京都府画学校卒業。日本南画院幹部を務め、反帝展の日本自由画壇結成。版画例は、『義士大観』（義士会出版部 1921）に一図《堪忍袋》。1933年『桂仙遺集』（自由画壇編 芸艸堂）。1931（昭和6）年12月27日京都市で逝去。【文献】『20世紀物故日本画家事典』（美術年鑑社 1998）（岩切）

池田貞夫（いけだ・さだお）

長野県上水内郡信濃尻に生まれる。長野県師範学校に在学中、生徒が発行した版画誌『樹水』第1号2598年版（1938）に《野尻》、第2号2600年版（1940）に《第一線》、第3号〔1941〕に《三月月》を発表する。同校を1942年に卒業。1950年当時上水内郡野尻中学校に勤務。【文献】『卒業生名簿 昭和25年』（信州大学教育学部本校 1950）（加治）

池田蕉園（いけだ・しょうえん） 1886～1917

1886（明治19）年5月13日、榊原浩逸・綾子の長女・百合子（由理子）として神田雉子町に生れる。1901年、水野年方入門。烏合会に参加、会員。閨秀画家として明治後期から大正初期に活躍。『女学世界』、『女鑑』、『少女画報』、『芸芸倶楽部』、『新小説』、『演芸倶楽部』などの挿絵・口絵、木版多色摺口絵では泉鏡花『柳篁』、『白鷺』が知られる。1911年池田輝方と結婚。1916年版元・秋山武右衛門から《霧の中に横たわる美人》を出版。また美人画《新浮世絵美人合・十一月・小春日》（大判錦絵、村上版 没後の1924年発行）等がある。1917（大正6）年12月1日逝去。【文献】『おんなえ 近代美人版画全集』（阿部出版 2000）（岩切）

池田信吾（いけだ・しんご） 1893～1975

1893（明治26）年栃木県河内郡篠井村（現・宇都宮市）に生れる。栃木県師範学校卒業後、教職に就く。1923年に姿川尋常高等学校に赴任し、そこで同僚の篠崎喜一郎を通して版画家川上澄生を知る。1925年には川上を中心として同校の同僚たちと版画誌『村の版画』を創刊させるが、池田は編集者として活躍し、実質的な発行のリーダーとしての役割を果たした。『村の版画』の第1号（1925.1）に《長羅宇ノ印象》のほか表紙絵、第2号（1925.2）に《夕鐘》《柿岡所見》、第3号〔1925.4〕に《映画前ノ楽師》、第4号（1925.7）に《愛犬》と裏表紙絵、第5号（1925.9）に《芋畑》、第6号（1925.11）に《菜》、第7号（1926.1）に《賀状》《河水清》を発表する。第7号を刊行した後に平石第一尋常小学校へ転勤となり、当時としては交通不便な事情もあり、地域性の強い同人誌にとって実質的な発行責任者を失ったことになって、『村の版画』は休刊に陥る。しかし翌1927年には、より近い

宇都宮市内の築瀬尋常小学校に赴任となったため1929年に復刊。第8号(1929.1)に《金輪》《年賀状》を発表し、以後1934年『村の版画』第19号(1934.2)で廃刊するまで、編集にかかわりながら作品を発表した。廃刊後の版画制作は年賀状を彫るくらいとなる。そのほか1932年の下野新聞に《宮の百景(宇都宮百景)1~16》を連載したり、『版芸術』第9号(1932.7)に《賀状》を発表したり、新興版画会第1回展(1931.6.21~25 新宿・三越)に2点出品(『版画CLUB』第3巻1・2号)するなど、多くの版画家とも交流をもった。宇都宮を訪れた平塚運一に進言されたことにより、1925年頃から職場の教育現場では、版画制作を授業の中に取り入れ、版画を教育課程に反映させ、当時としては画期的な美術教育を実践した。これは全国に展開していた児童自由画運動に沿うことにもなり、版画による図画教育の先駆けとなった。1975(昭和50)年逝去。【文献】『版画をつづる夢』(宇都宮美術館 2000) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

池田瑞月(いけだ・ずいげつ)

1932年に『瑞月草花画譜』(木版60枚)を制作。戦後、ニッカウイスキー創業者・加賀正太郎の依頼で、蘭栽培の記録として1946年に『蘭花譜』の下絵を描く。『蘭花譜』は、時には120度も摺り合わせたと云われる池田瑞月原画による木版画88枚、岡本東洋撮影の写真7枚、中村清太郎の油絵の印刷図版9枚の全104枚の画譜。300部作られ、200部が市販用、100部は学術的記録として世界の有力大学に寄贈された。第二輯の刊行も予定されたが、実現しなかった。【文献】中山禎輝『アサヒビール大山崎山荘 美術館誕生物語』(PHP研究所 1996) / 『山田書店新収目録』31・98(1997・2011夏)(樋口)

池田 健(いけだ・たけし)

大分県大野郡で生野正義ら教員仲間が発行していた版画誌『大野版画』第1号(1933.12)に《とうきび》、第2号(1934.2)に《巖頭犬〔賀状〕》、第4号(1934.7)に《芙》を発表する。当時、大分県直入郡松本村(現・竹田市)に在住し、教員として県内の学校に勤務。編集者の生野正義とは教員仲間である。【文献】池田隆代『大分県における創作版画誌』『大分県立芸術会館研究紀要』1(2002) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

池田輝方(いけだ・てるかた) 1883~1921

1883(明治16)年1月4日、京橋区木挽町に池田吉五郎の次男(正四郎)として生れる。1895年水野年方の内弟子として入門。1901年には鑄木清方、鱈崎英朋等と烏合会の結成に参加。1900年以降、日本絵画協会で活躍し賞を得る。文展第6回以降は同展で活躍し数々の賞を受賞。曙画塾を開く。『演芸倶楽部』、『新小説』等に挿絵を描く。版画作品としては、日露戦争錦絵《大日本帝国海軍大勝利萬歳》、《我軍鳳凰城占領大日本陸軍大勝利萬歳》(福田版、三世彫栄、共に大判錦絵三枚続1902)、また美人画《新浮世絵美人合・一月・賀賀多》(大判錦絵、村上版 没後の1924年発行)等がある。木版口絵は高山房、春陽堂の単行本、特に『相合傘』(泉鏡花、鳳鳴社 1914)では妻の蕉園と合作。1917年に妻・閨秀画家・池田蕉園を失い、1921(大正10)年5月6日逝去。晩年の住所は東京市麴町区下六番町10。墓は谷中霊園にある。【文献】『おんなえ 近代美人版画全集』(阿部出版2000)(岩切)

池田秀雄(いけだ・ひでお)

山形県酒田で発行された版画誌『隕石ト花々』第1号(1933.1)に《とまや》を発表。『隕石ト花々』は夭折した洋画家小野幸吉を巡る友人達の版画同人誌。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

池田正雄(いけだ・まさお)

1934年8月、大分県師範学校主催で第6回図画講習会(8.1~5)として行なわれたエッチング講習会(講師:西田武雄)に参加(『エッチング』22 1934.8)。翌1935年8月には九州版画協会主催の版画講習会(「編集後記」『九州版画』8)にも参加する。この時制作された木版画《風景》は『九州版画』第8号講習会記念号(1935.10)に掲載されている。1934年当時、大分県南院内小学校に勤務。【文献】池田隆代『大分県における創作版画誌』『大分県立芸術会館研究紀要』1(2002) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

池田遙邨(いけだ・ようそん) 1895~1988

1895(明治28)年岡山県に生まれる。1910年福山尋常小学校卒業後、松原三五郎の天彩画塾で洋画を学ぶ。郷里の先輩小野竹喬の勧めで日本画に転向し、竹内栖鳳の竹杖会、その後京都市立絵画専門学校に学び、1926年同校研究科を修了。帝展に出品し、1928年《雪の大阪》、1930年《烏城》で特選を受賞し評価を確立する。旅を愛し、「旅の画家」と呼ばれた。1987年文化勲章受章。1988(平成元)年9月26日逝去。生前の版画は、1933年に木版画《白牡丹》《寒椿》《菊》《山茶花》などがある。【文献】『没後20年 池田遙邨展』図録(海の見える杜美術館 2008) / 『山田書店新収目録』30・66(1997.10 2005春)(樋口)

池田盧江(いけだ・ろこう)

《住吉神社》《伊勢神宮内宮》《早春の南回堂》《平安神宮の春》(各28×37cm)などの木版画が知られる。戦前作品と思われるが、詳細は不詳。(樋口)

池長 昭(いけなが・あきら)

北海道名寄中学2年在学中、西田武雄発行の『エッチング』第75号(1939.1)に銅版画(題名不詳)を発表する。当時、名寄中学校には版画教育に熱心な松田操教諭がおり、池長は松田の教えを受けたと考えられる。松田は『エッチング』誌に名寄中学校で行われたエッチング講習会の受講記や随筆などを投稿しており、生徒に図画教育の一環としてエッチングの指導を行ったと思われる。【文献】『エッチング』(加治)

池永竹夫(いけなが・たけお)

大分県師範学校在学中に東京の平塚運一が発行した『版画研究』第1巻1号(1932.3)に木版画《みやまうらじろ》を投稿する。その翌年には西田武雄発行の『エッチング』第7号(1933.5)、第14号(1933.12)、第26号(1934.12)に銅版画を発表する。それと並行して大分の武藤完一が発行していた版画誌『彫りと摺り』第8号(1933.6)にも木版画《風景》を発表する。当時、武藤は大分県師範学校で教鞭をとっており、池永は直接版画制作の指導を受けたものと思われる。【文献】『エッチング』 / 『創作版画誌の系譜』(加治)

池淵馬玩堂 (いけふち・ばがんどう)

中島重太郎が主宰した創作版画倶楽部の情報誌『版画 CLUB』第5回紙上展に選外佳作の2席に選ばれた《製材所》の紹介記事あり、選者の深沢索一は「池淵氏「製材所」自然を忠実に見てゐる点を買います。刀法未だいたらない憾みとします」と評している。【文献】『版画 CLUB』2-1号(東京・創作版画倶楽部 1930.1)(樋口)

池部 釣 (いけべ・ひとし) 1886～1969

1886(明治19)年3月3日東京に生まれる。旧姓山下。1919年親戚の養子となり池部姓となる。石井柏亭の紹介で渡辺審也に師事。1910年東京美術学校西洋画科卒業。1911年朝鮮京城日報社に入社。1914年国民新聞に移る。先輩に平福百穂がおり、漫画スケッチを担当。1916年漫画誌『トバエ』、1917年『漫画』、1922年『漫画の畑』などの漫画誌創刊にかかわる。1921年第3回帝展に《大道芸人》が初入選。1928年第9回帝展、1930年第11回帝展で特選受賞、無鑑査となる。1938年一水会会員。戦後も日展、一水会に出品を続けた。版画は一水会編輯『丹青』(発行部数350部)第2巻第2号(1939.9)に掲載の石版《楽隊の女》が知られる。1969(昭和44)年12月17日逝去。俳優の池部良は息子。【文献】『丹青』2-2(教育美術振興会 1939.9) / 『1920年代日本展』図録(東京都美術館・山口県立美術館 1988) / 『近代日本美術事典』(講談社 1989)(樋口)

井澤明策 (いざわ・めいさく)

宇都宮の築瀬尋常小学校に1930年から1939年まで勤務するが、同校の同僚には池田信吾らがあり、彼らの発行していた版画誌『村の版画』の存在を知る。その第12号〔通巻第12号〕(1932.1)に《年賀》、《舟》と裏表紙絵を發表したのを始め、1932年3月号〔通巻第13号〕に《静物》、第4号〔通巻14号〕(1932)に《無題》、第6号〔通巻16号〕(1932)に《真岡街道》、そして第8号〔通巻18号〕(1933.1)に《つば》を發表する。【文献】『版画をつづる夢』図録(宇都宮美術館 2000) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

石井清輝 (いしい・きよてる)

川上澄生が英語教師として赴任していた宇都宮中学校(現・宇都宮高等学校)在学中、美術サークル「パレット会」に所属し活動する一方、版画にも興味を持ち、生徒が発行していた版画誌『刀』に参加する。その第11輯(1931)に《狩点影》、第12輯(1931)に《人物》、第13輯(1932)に《静物》を發表。1935年、同校卒業後は海軍機関学校に入学。【文献】『版画をつづる夢』図録(宇都宮美術館 2000) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

石井鶴三 (いしい・つるぞう) 1887～1973

1887(明治20)年6月5日東京府下谷区仲御徒町に生まれる。画家石井鼎湖の三男、石井柏亭は長兄。1904年から小山正太郎の不同舎で洋画を学び、また高村光雲門下で遠縁の加藤景雲から木彫を学んだ。1905年東京美術学校彫刻科選科に入学。1907年彫刻科が塑造、木彫、牙彫の3部に分けられたのを機に塑造部に移り、1911年第5回文展に《荒川嶽》が入選。褒状を得て、新進作家として注目される。1913年東京美術学校研究科修了。1915年日本美術院に入り、中原悌二郎、戸張弧雁らと彫刻を研究。翌年には同人になり、《俊寛頭部試作》(1930)

などの代表作を發表。美術院彫塑部が解散する1961年まで、同部の代表的作家として活躍するとともに、1944年には東京美術学校彫刻科教授となり、1959年に退官するまで多くの後進を育てた。また、油彩画・水彩画・版画・挿絵などでも独自の才能を發揮したことで知られ、水彩画は1916年の二科展に出品した《行路病者》で二科賞を受賞。1921年には日本水彩画会員になっている。また画家としては、1922年の春陽会創立に客員として参加。第2回展からは会員として出品し、同会の主要会員として活躍した。新聞小説の挿絵においても、中里介石の『大菩薩峠』(1925～1928 断続あり)、吉川英治の『宮本武蔵』(1938～1939)などの代表作がある。

版画は、山本鼎が創作版画運動の基点となる《漁夫》を發表した1904年頃に石井家に同居していたこともあってか、創作版画の草創期から制作を始めている。1905年に美術文芸雑誌『平旦』(1905.9～1906.4 5冊)に参加し、第1号にニコルソン原画の版画《猫》を、第3・4・5号に自刻木版《虎》、《え〔ほ〕りもの》、《見る人聞く人》を發表。特に自刻木版の3点は、山本の提唱する「刀画」に呼応するものだった。その後中断があり、本格的に始めるのは1918年頃からで、1919年の日本創作版画協会第1回展に《泣く子》《雪国》《山の鳥》《辰・巳・午・未》を出品。以後、1921年の第3回展を除き、1929年の第9回展まで毎回出品した。その間、1922年には会員になっている。また、版画家が大団結した1931年の日本版画協会設立にも主要会員として参画。理事を務め、ほぼ毎回出品。1944年には岡田三郎助(1939.9逝去)の後を承け、二代目の会長となり、1973年に亡くなるまでその職を務めた。現在160点ほどの版画が確認されており、そのほとんどが自画・自刻・自摺の木版画であるが、職人との協働作品(『日本風景版画第九集 東京近郊の部』(1917)《東京駅夕景》(1928)など)、石版画(《風神》(1923)《雪》(1932)など)も手がけている。1950年日本芸術院会員。1973(昭和43)年3月17日東京都板橋で逝去。【文献】『日本美術年鑑 昭和49・50年版』(東京国立文化財研究所 1976) / 『石井鶴三版画集』(形象社 1978) / 『日本版画協会史 1931-2012』(日本版画協会 2012)(三木)

石井柏亭 (いしい・はくてい) 1882～1958

1882(明治15)年3月29日に東京府下谷区仲御徒町に生まれる。本名は満吉。画家石井鼎湖の長男、弟に鶴三。幼い頃より父から日本画の手ほどきを受ける。1894年神田の共立中学に入学。同年の日本美術協会出品作が宮内省買上げ。1895年共立中学を退学。大蔵省印刷局の彫版見習生となり、1904年まで勤務。1896年頃から水彩画を独習。1898年浅井忠に学ぶ。同年明治美術会準会員。1902年第二次『明星』新年号から挿絵、11月号から時評を寄稿。同年太平洋画会会員。1904年東京美術学校西洋画科選科に入学(翌年退学)。この年の『明星』辰歳第7号に山本鼎が發表した自刻木版画《漁夫》について、同誌の「パレット日記」に「〔六月〕十六日。友人山本鼎君木口彫刻と絵画の素養とを以て画家的木版を作る。刀は乃ち筆なり。本号に挿したるものは是れ」と紹介。この文は、創作版画運動の宣言文ともなっている。1905年美術文芸雑誌『平旦』の創刊に参加。1907年創作版画の普及を目的に美術文芸雑誌『方寸』(1907.5～1911.7 35冊)を山本鼎、森田恒友と創刊。自刻の木版、エッチング、石版、ジंक版の作品を發表した。同年第1回文展に入選。

1908年木下柰太郎らの「パンの会」結成に参加。1910年から1912年にかけて渡欧。1913年日本本水彩画会を石川欽一郎、丸山晚霞、戸張孤雁らと結成。1914年には二科会を有島生馬、山下新太郎らと結成。1935年帝国美術院改組により会員となるが、二科会から異議があり、同会を脱退。同時に帝国美術院会員も辞退。翌年一水会を有島生馬、山下新太郎、安井曾太郎らと結成。1937年帝国芸術院会員。戦後も日展、一水会展、日本水彩画会展の重鎮として活躍。1947年日本芸術院会員になった。

創作版画運動の先駆者の一人であるが、自画・自刻の作品は少なく、『方寸』誌上に発表した一連の作品、『木場』(木版 1914)、《上野》(石版 1914)、晩年の《室内》(石版 1957)などが確認できる程度であるのに対し、彫師・摺師と組んだ作品が多いのも特色で、伊上凡骨の彫版による木版画集『東京十二景』(1910、1914～1917 9景で終了)、『日本風景版画第一集 北陸之部』、『日本風景版画第四集 下総之部』(各 1917)、『日本風景版画第八集 朝鮮之部』(1918)などがある。1958(昭和33)年12月29日東京都で逝去。【文献】『柏亭自伝』(中央公論美術出版 1971) / 『石井柏亭 絵の旅』(渋谷区立松濤美術館 2000) (三木)

石井三冬 (いしい・みふゆ) 1918～没年不詳

1918(大正7)年12月、洋画家石井柏亭の3女として東京に生まれる。1934年3月、文化学院女学部3年在学中、洋画家赤城泰舒の指導のもと、講師西田武雄のエッチング実習を受講する。制作した銅版画は西田発行の『エッチング』第17号(1934.3)に掲載される。結婚後松村三冬と名のり、戦後は一水会会員となる。【文献】『エッチング』(加治)

石井了介 (いしい・りょうすけ) 1898～1984

1898(明治31)年7月26日熊本県玉名郡外目に生まれる。従兄に北原白秋がいる。また、山本鼎は従姉の夫。1916年熊本県立玉名中学を卒業し、京都絵画専門学校予科に入学。1918年同校予科を修了し、上京。1920年東京美術学校日本画科予備科に入学。1926年同校日本画科を卒業し、山本鼎の日本農民美術研究所産業部東京出張所を手伝う。1927年第8回日展に日本画が入選。同年農民美術研究所に勤務のため長野県大田へ転居。日本画の制作はほとんど出来なかったが、山本鼎より木版画を学ぶ。1928年日本創作版画協会第8回展に木版画《雪のこもろ》《機織》《信濃高原》《国境の連山》が初入選し、会友となる。また、春陽会第6回展に《白き雲》を出品。この年帰京し、日本児童文庫(アルス刊)の挿絵の仕事などを手がける。1929年日本創作版画協会第9回展に《漁村風俗》を出品。1930年農民美術研究所を退所。再び日本画家として官展を目指すも果たさず。一方、版画家としての活動は、1932年日本版画協会会員に推挙され、同年の第2回展に《高原》を出品。以後、1933年の第3回展に《阿蘇山》、1938年の第7回展に《阿蘇山》(「新日本百景」第1期作品50景のうち)、1944年の第13回展に《幸若舞》(前線将士慰問作品)を出品している。1942年に父の病状悪化もあり、南関町の実家に引き上げ、翌年南関高等女学校の図画教師になった。戦後は、1947年に南関高等女学校を退職し、町会議員(1947～1951、1955～1959)、農協会長(1951～1955か、1964～1965)、南関町長(1967～1975)などを務める傍ら、版画制作に精力的に取り組み、日本版画協会展

には1948年の第16回展から復帰し、第17・20・23・25・27・28回展に出品し、1960年に退会。日展にも1957年の第13回に木版画《阿蘇の外輪山》が初入選し、以後1975年の第7回改組日展までの間に10回入選。また、1960年に前川千帆・棟方志功らによって結成された日本版画会展にも晩年まで出品している。1978年第6回熊本県芸術功労者賞受賞。1983年には『白秋生誕百年記念・白秋詩歌版画集』(限定85部)を刊行した。1984(昭和59)年9月21日熊本県玉名郡南関町で逝去。【文献】坂田煉「石井了介の画業」『研究紀要』3(熊本県立美術館 1989) / 『石井了介版画展』(図録(玉名市立歴史博物館ころピア 2000)) (三木)

石川一枝 (いしかわ・かずえ)

1913年2月発行の俳句雑誌『層雲』第3巻第7号に木版挿絵《見てみる男》《黒塚》2図を掲載。『層雲』同人。【文献】『層雲』3-7(層雲社 1913.2) / 寺口淳治・井上芳子「大正初期の雑誌における版表現—『月映』誕生の背景を探って—」『大正期美術展覧会の研究』(東京文化財研究所 2005) (樋口)

石川哲次 (いしかわ・てつじ)

愛知県半田の教師仲間による版画団体「版刀会」が発行した版画誌『運』第5号(1931)に木版画2点(題名不詳)を発表する。現在『運』は5～7、10号(1931～1935)のみを確認。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

石川寅治 (いしかわ・とらじ) 1875～1964

1875(明治8)年4月5日高知市鉄砲町に生まれる。1891年不同舎入門。1901年太平洋画会創立メンバー。1902年～1904年米国経由で欧州留学。絵画としては明快堅実な風景画、特に港、船舶を題材に用いた。版画では吉田博の版画制作に感化を受け、あくまでも職人と協業の私家版で制作。裸婦探求の版画を(大正末期?～1935)までに制作し1935年に10点を選んで『裸女十種』(緑雨荘画室刊)として発行。彫は山岸主計、摺は漆原栄次郎(後に大半は松崎啓三郎担当)。裸婦の他に風景版画もある。生涯版画制作総数は30点(小品も含む)程度と見られる。1952年に芸術院賞恩賜賞。1964(昭和39)年8月1日逝去。【文献】岩切信一郎「石川寅治の裸婦版画をめぐる」『一寸』34(2008) (岩切)

石川正澄 (いしかわ・まさずみ)

山口県に生まれる。東京高等工芸学校(現・千葉大学工学部)在学中、印刷工芸科の生徒による版画同人誌『刀画』に参加。第2号(1935.10)に《母校》《ジョセフィン ベーカー》を発表する。1937年3月同校を卒業し、大日本印刷株式会社に勤務。【文献】『東京高等工芸学校一覽 昭和14年版』(東京高等工芸学校 1940) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

石川正義 (いしかわ・まさよし)

愛知県半田の版画団体「版刀会」(1928年7月に同地の亀崎第一尋常高等小学校で開かれた平塚運一の版画講習会に参加した教師たちが結成)の会員で、当時は地元の小学校教員だったと考えられる。同会発行の創作版画誌『運』は、現在、第5～7号(1931～1932)と第10号(1935)が確認されているが、各号に草花をモチーフにした木版画を発表。また、1931年の日本版画協会第1

回展に《鶏頭草》が入選した。【文献】『日本版画協会第一回展出品目録』/ 加藤祐子「平塚運一による版画教育普及活動の一端：版画講習会開催とその余波—愛知県半田市亀崎を例に—」『版画家・平塚運一の世界展』図録（高浜市やきものの里かわら美術館 2003）/ 『創作版画誌の系譜』（三木）

石川 操（いしかわ・みさお）

愛知県半田の教師仲間による版画団体「版刀会」が発行した版画誌『運』第5号〔1931〕に木版画2点（題名不詳）、第10号〔1935〕に《葉蘭》を発表する。現在『運』は5～7、10号（1931 - 1935）のみを確認。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

石川柳城（いしかわ・りゅうじょう） 1847～1927

1847（弘化4）年10月26日名古屋に生れる。名古屋で吉田稼堂に師事し南宗画を、京都で文人画を学ぶ。詩や書も能くした。日本南宗画会を結成。名古屋で後進の指導につくした。1927（昭和2年）11月17日逝去。版画は下村観山、松岡映丘ら82名が各場面を1図ずつ担当し赤穂義士の事跡をまとめた豪華木版画集『義士大観』（1921年出版 義士会出版部 限定300部）に《父兄へ訣別》がある。【文献】『20世紀物故日本画家辞典』（美術年鑑社 1998）（岩切）

石川良一（いしかわ・りょういち）

川上澄生が英語教師として赴任していた宇都宮中学校（現・宇都宮高等学校）3年在学中、生徒が発行した版画集『刀 再版』に参加。その第4号〔1941〕に《遊び》、第5号〔1941〕に《村の鎮守》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

石黒幸太郎（いしぐろ・こうたろう）

創作版画倶楽部を主宰した中島重太郎は『新東京百景』の頒布にあわせて、創作版画の理解と愛好のために情報誌『版画 CLUB』（1929～1932）を刊行する。版画を一般から公募し、その誌上に掲載したが、石黒はその第2年1号（1930.1）の CLUB 紙上展第5回の3席に《少女》が入賞。選者の深澤索一は、「刻法に愛情と親切を受け取ります。度を過すと俗に流れます。切角精進を祈ります」と評している。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

石崎光瑤（いしざき・こうよう） 1884～1947

1884（明治17）年4月11日富山県西砺波郡に生れる。本名猪四一（ししいち）。1896年上京して山本光一に琳派を学び、1903年京都に移って竹内栖鳳に師事する。インド旅行の取材による《熱国妍春》で1918年文展特選、翌年も《燦雨》で帝展特選となり、1924年帝展委員、1936年京都市立絵画専門学校教授などを務める。高野山金剛峯寺襖絵などを制作。1947（昭和22）年3月25日京都で逝去。版画は下村観山、松岡映丘ら82名が各場面を1図ずつ担当し赤穂義士の事跡をまとめた豪華木版画集『義士大観』（1921年出版 義士会出版部 限定300部）に《寒梅一枝》1図を残す。【文献】『20世紀物故日本画家辞典』（美術年鑑社 1998）（岩切）

石崎重利（いしざき・しげとし） 1901～1999

1901（明治34）年7月5日愛媛県中島町野忽那に生まれる。小学校卒業後、上京し、神田の中学校で学ぶも

中退。その後、友人の父・鷹田其石に師事し、日本画を学ぶ。1921年頃から木版画を始め、1924年の日本創作版画協会第6回展に《風景》が初入選。以後、同展の第7～9回展（1927～1929）、その後身である1931年の日本版画協会1回展に出品。1932年には会員となり、第2回～5回展（1932～1936）、第9回～12回展（1940～1943）に出品。同会の企画した「新日本百景」の《宮島》（1940）も担当している。その間、1927年の第8回帝展に《郊外風景》と翌年の第9回帝展に《幟立つ瀬戸》が入選した他、国画会展にも1932年の第7回、第17～19回展（1942～1944）と出品。また、創作版画誌にも参加し、『HANGA』第16輯（神戸・版画の家 1930.4）、素描社の『版画』第4号（1930.3）と第5号（1930.5）、『きつつき版画集』昭和17年と18年版（きつつき会 1942.8、1943）に木版画を発表している。戦後は、郷里の野忽那に戻り、教育委員、民生委員などを務める一方、1952年に愛媛県美術会常任理事、愛媛県美術展審査員となり、以後1971年まで、ほぼ毎年の県展に出品。1972年には愛媛県美術会名誉会員になっている。代表的作品集に《松山名所図会》（1933）、『富士五湖』（1937）、『瀬戸内十二景』（1937）などがある。1999（平成8）年3月31日愛媛県中島町野忽那で逝去。【文献】『石崎重利版画集』（石崎重利版画集刊行会 1984）/ 『創作版画誌の系譜』（三木）

石崎英雄（いしざき・やすお）

版木会が発行した創作版画集『版』第5輯 春陽号（1937.5）、第6輯（1937.6）に各1点、第7輯スタンプ〔特集〕（1937.7）に2点の木版画を発表する。版木会は同誌に掲載されている校章や題材から愛知県知多郡師崎町（現・南知多町）の学校（当時・師崎町立師崎中学校）の版画同好会と考えられる。（加治）

石田成太郎（いしだ・せいたろう）

1936年10月24・25日に行なわれた日本エッチング研究所主宰、横浜美術協会後援の横浜エッチング講習会に参加。当時大森第二小学校所属。同講習会参加名簿には、その頃横浜大岡小学校教員だった片岡球子の名前も見られる。1943年日本版画奉公会新会員。当時目黒区中根町在住。【文献】『エッチング』49・127（1936.11、1943.8）（樋口）

石田梅軒（いしだ・ばいけん）

1935年8月、平塚運一を講師に招いて長崎の磨屋小学校で開催された、田川憲らによる版画長崎の会主催第2回版画講習会（9日）に参加。当時、同地の小・中学校教員の一人だったと思われる。【典拠文献】阿野露田『長崎を描いた画家たち（上）』（明文社 1988）（樋口）

石田道尚（いしだ・みちなお）

東京美術学校油画科在学中、3学年の時（1937年）に高田（浜田）知明らと共に東京美術学校臨時版画教室エッチング部に所属する。同校の油絵科学生たちが結成したグループの一つ「新浪漫派」同人。【文献】『エッチング』57（1937.7）/ 『グループ〈貌〉とその時代展』図録（郡山市立美術館 2000）（樋口）

石塚 翰（いしづか・たかし）

俳句雑誌『層雲』同人。1913年9月の『層雲』第3

巻第7号に木版挿絵《自画像》を発表。挿絵図版上部にローマ字で「Takashi」の記名がある。1915年似顔洞の役者シリーズにかかわる作家と同一人かは不明。【文献】『層雲』3-7(層雲社 1913.9) / 寺口淳治・井上芳子「大正初期の雑誌における版表現—『月映』誕生の背景を探って—」『大正期美術展覧会の研究』(東京文化財研究所 2005) / Guide to Modern Japanese Woodblock Prints:1900-1975 (Helen Merritt / Nanako Yamada 1992) (樋口)

石塚喜三 (いしづか・きぞう)

西田武雄が発行した『エッチング』第72号(1938.10)に銅版画《古き船造船場》を発表する。【文献】『エッチング』(加治)

石塚太喜治 (いしづか・たきじ)

1934年3月の『エッチング』第17号から1938年1月の第63号にかけてクルツ・グラゼル著『ムンク』の翻訳を43回に分けて連載(不定期)したほか、第26号(1934.12)に銅版画《少女》、第59号(1937.9)に《靴下》、第72号(1938.10)に《古き船造船場》の図版が掲載されるなど、同誌に多くの足跡を残す。1938年日本版画協会展第7回に《北国の小港》(エッチング)を出品。1939年から文部省海外研修生として2年間北京に渡る(『版画家名覧』による)。1941年6月の第2回日本エッチング展には北京から《造船場》を出品。また、未見であるが熊谷守一宛の「異動挨拶状」(岐阜県歴史資料館所蔵「熊谷守一文書」)があり、同年11月に北京育成学校から国立北京芸術専科学校へ移っている。1943年6月の『日本版画』(『エッチング』改題)第127号に「日本版画奉公会新会員」の名簿があり、住所是北京西皇城根22号となっている。その後の消息は不明。【文献】『第七回版画展目録』(日本版画協会) / 『エッチング』 / 『創作版画誌の系譜』(三木)

石寺信一 (いしでら・しんいち)

1936年8月、西田武雄を招いた名古屋でのエッチング座談会(27日 電気ビル食堂)に参加。長船一雄、浅井紫明らが中心となって生れた名古屋エッチング協会創立会員の一人。【文献】『エッチング』47(1936.9) (樋口)

石橋半風子 (いしばし・はんふうし)

東京で関谷忠雄が主宰した詩と版画の同人誌『牧神』の第4号(1930.7)から同人として参加。同号に《かりね》《裸体スケッチ》、第2巻第7号(1930.10)に《鏡の前》《風景》、[第2巻]第8号(1930.11)に《無題》を発表する。特に《裸体スケッチ》など人物を題材とした作品では白と黒のコントラストを主体とした作風を基調としている。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

石原玉吉 (いしはら・たまきち)

『婦人グラフ』第1巻第3号(国際情報社 1924.7)表紙絵に木版《夏風》、『婦人グラフ』第1巻第4号(1924.8)に機械刷木版《松田夫人の夢》、『婦人グラフ』第3巻第11号(1926.11)に木版表紙絵を制作、その他カットなどを寄せる。光風会第4回展に油彩画《拷のスケッチ[ママ]》《はつ夏の或る日のこと》の出品歴あり。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) (樋口)

石原壽市 (いしはら・じゅいち) 1914?～没年不詳

1914(大正3)年か、大阪に生まれる。本名は壽一か。1932年に福岡県久留米市の明善中学校を卒業し、1933年東京美術学校油画科予科に入学。1934年本科に進み、南薫造教室に学ぶ。同年、同級の萩原英雄・杉原正巳(当時は石川姓)と版画研究会を結成。1936年頃から同校臨時版画研究室で、加藤太郎、杉原、若松光一郎らと共に同研究室木版部嘱託の平塚運一から指導を受ける。1937年第12回国画会展に木版画《青年》など3点を出品。また、同年の日本版画協会第6回展にも木版画《昼寝》など5点を出品。協会賞を受賞し注目された。1938年東京美術学校油画科卒業。同年の第13回国画会展に木版画《町の子》出品。12月に久留米の野砲兵連隊に入営し、満州牡丹江省に出動するもその後の消息は不明。ビルマ(現ミャンマー)で戦死したと伝えられる。【文献】『グループ《貌》とその時代展』図録(郡山市立美術館 2000) (三木)

石原丁巳 (いしはら・ちょうみ)

長野県下伊那郡根羽に生まれる。長野県師範学校1部5年に在学中、生徒が発行した版画誌『樹水』第1号2598年版(1938)に《人物》を発表する。1939年同校を卒業。1950年当時は教育研究所に勤務。【文献】『卒業生名簿昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950) (加治)

石原益夫 (いしはら・ますお)

甲府で秋山喜久三ら3人が発行した版画と文芸の同人誌『線 SEN』は全5号(1928～1931)が刊行された。その最終号となった第4巻5号(1931.1)に《日野春風景》と《鉄塔のある風景》を発表する。編集者秋山菊造(喜久三)は「編者の頁」で「石原君は八ヶ獄の麓近くで教鞭をとってある人」と紹介している。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

石原義己 (いしはら・よしみ)

川上澄生が英語教師として赴任していた宇都宮中学校(現・宇都宮高等学校)3年在学中、生徒が発行した版画集『刀 再版』に参加。その第4号[1941]に《水鳥》、第5号[1941]に《百合》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

石渡江逸 (いしわた・こういつ) 1897～1987

1897(明治30)年10月17日東京に生まれる。本名は小倉庄一郎。庄一郎、東江、芳美(よしみ)とも号す。着物の模様師だった義兄・井草仙真に絵や図案を学び、川瀬巴水に師事。関東大震災後、横浜野沢屋図案部に勤務。ここで出会った妻の婿養子となり石渡姓を名乗る。1930年退社。川瀬巴水の紹介で版元・渡辺庄三郎を知り、渡辺版画店から「江逸」の号で1931年頃より《横浜万国橋》《横浜長島橋所見(洛陽)》《雨に暮るる横浜港》など「横浜風景」を制作。都会の何気ない日常風景を描く。なかでも1932年の《夜の浅草》はきらびやかな夜の浅草六区を描いて人気が高い。また1933年から「東江」、「庄一郎」の号で、加藤潤三の加藤版画研究所から大判合羽刷《ひまわり》《南京町》、木版《隅田川 外》(5枚組)や「おもちゃ絵集」(24枚組)などを出版する。刊年は不明だが版元・多田鉄之助から「昭和東都著名料亭百景」と銘打った《上野昭月園》《日本橋浜町醒醐》などの作品もある。その他『浮世絵界』第2巻8号(1937.8)の口絵に合羽刷《清洲橋を望む》(1937)や「芳美」の号で風景

版画などを残す。版画奉公会会員。戦後は文具デザインなども手がけたという。1987(昭和62)年12月7日逝去。【文献】『原色 浮世絵大百科事典 第十巻』(大修館1981) / 『近代版画にみる東京』図録(江戸東京博物館1996) / 『浮世絵大辞典』(国際浮世絵学会編 2008) / 『よみがえる浮世絵』図録(江戸東京博物館 2009) / 『山田書店新収美術目録87号』(2009春)(樋口)

異人館四郎(いじんかん・しろう)

1938(昭和13)年に畦地梅太郎、小栗慶太郎とともに芸術作品としての蔵書票の研究・普及・販売を目的とする「版人堂」を結成。7月に『版人堂りーふれつと』第1号、11月に第2号を発行。第1号では結成挨拶、第2号では武田由平が新たに同人に加わったことや『版人堂第一回蔵書票作品集』(木版32葉、銅板11葉、未見)の刊行予告が紹介されている。当時の住所は東京市中野区氷川町24。また、1940年の日本版画協会展第9回展に木版画《卒業式》を出品している。【文献】『版人堂りーふれつと』1・2(1938.7、1938.11) / 『第九回版画展目録』(日本版画協会)(三木)

和泉 勇(いずみ・いさむ)

青森で発行された青森創作版画研究会の版画誌『陸奥駒』第16集(1934.12)に年賀状を発表する。【文献】『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』図録(青森県立郷土館 2001) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

泉 知巳(いずみ・ともみ)

大分県中津で教員をしていた1931年8月に、武藤完一の尽力で開かれた東京創作版画倶楽部主催の創作版画講習会(大分県師範学校図画教室 講師・平塚運一)を受講。講習会をきっかけに生まれた2つの創作版画誌、『彫りと摺り』(編集・武藤完一 8冊 1931.9~1933.6)と、講習会を受講した中津の教員仲間が発行した『空巢』(編集・武田由平 4冊か 1931~1932)に参加。『彫りと摺り』では第1・3・5・6・7号に、『空巢』では第1・3・4号に作品をそれぞれ発表している。その後、1933年8月に武藤の尽力で再び平塚運一を招き、2回目の創作版画講習会(大分県師範学校図画教室)が開催されるが、これをきっかけに大分県師範学校内の版画研究会が九州版画協会へ刷新され、『彫りと摺り』も『九州版画』(編集・武藤完一 24冊 1933.9~1941.12)と改題するが、同誌にも参加し、第1・2・5・6・9・14号に作品を発表。また、1932年の新燈社第10回展(大阪)に《雁来紅》(武藤完一旧蔵絵葉書による)、1935年の日本版画協会第4回展に《枇杷》が入選している。【文献】『郷土圖画』5(1931.10) / 武藤隼人「版画家・武藤完一資料集(戦前篇I)—作家年譜を中心として—」『東京学芸大学大学院教育研究科 修士主論文』(2010) / 『創作版画誌の系譜』(三木)

和泉 凡(いずみ・ぼん)

徳力富吉郎の木版画の指導を受け、1932(昭和7)年5月の第3回京都工芸美術協会展に入選(作品名不明)。11月の第1回関西創作版画展(京都)に《基督復活》《墨染風景》を、翌1933年1月の第3回京都創作版画会展に《満州風景》《満州娼婦》《墨染風景》など8点をそれぞれ出品した。また、徳力の主宰する丹緑会編の『版小品集』(発行年不明)に《Wind》を発表したほか、『賀

状版画集』(和泉凡編 1933か)をまとめ、平塚運一・諏訪兼紀・徳力富吉郎・亀井藤兵衛・麻田弁次・浅野竹二・武田新太郎とともに自身の《年賀状》(1932)を発表している。なお、名前の読みは版上のサインによる。【文献】『版 小品集』(丹緑会編 発行年不明) / 岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合資料館紀要』12(1984)(三木)

泉 三義(いずみ・みつよし)

大分県師範学校在学中に教師武藤完一からエッチングの教えを受け、制作した銅版画《福沢氏旧邸》が西田武雄発行の『エッチング』第60号(1937.10)に掲載された。この作品は武藤が生徒の佳作作品を西田に送った10点のうちの1枚。【文献】『エッチング』(加治)

出雲大雲(いずも・たいうん) → 出雲林次郎

出雲林次郎(いずも・りんじろう)

後に吉野姓に改姓(1943年頃か)。号は大雲。吉野大雲の名も使う。石版画を制作。1933(昭和8)年の日本版画協会第3回展に《港》が初入選。翌1934年の光風会第21回展に《窓から》、1935年の白日会第12回展に《新月》がそれぞれ入選。1936年からは再び日本版画協会に出品するようになり、同年の第5回展から1941年の第10回展まで、第8回展を除き毎回出品した。1940年頃からは「出雲林次郎」の他、「出雲大雲」「吉野大雲」の名も使ったようで、1940年の海洋美術第4回展には「吉野大雲」の名で出品(作品名不明)。翌年の第2回聖戦美術展には「出雲林次郎」の名で《宣撫隊自動車班の活躍》を出品している。また、1940年の造型版画協会第4回展に《春》《秋》《兎》《有楽街》、翌年の第5回展に《絶望》《乾杯》《少女》《製版手》を「出雲大雲」の名で出品。1942年の第6回展には「吉野大雲」の名で《河を掘る》《仁王像》を出品し、会友に推挙されている。1943年には「出雲林次郎」の名で日本版画奉公会会員になっているが、当時の住所は東京京橋区新富町3ノ31。『日本版画』(『エッチング』改題)128号(1943.9)に「版奉供出版画作品」の記事があり、《月》(木版下絵)《労働》《風景》《憩ふ農夫》《不動》(各石版画)の作品名が掲載されている。また、第133号(1944.2)には、「版報会員出雲林次郎(改姓吉野林次郎)氏は出征島根県浜田へ入隊された」の記事がある。その後の消息は不明。【文献】『エッチング』123 / 『日本版画』128、133 / 「日本版画協会展出品目録」 / 「造型版画協会展出品目録」 / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)(三木)

伊勢 正義(いせ・まさよし) 1907~1985

1907(明治40)年2月28日秋田県鹿角郡小坂町に生まれる。1931年東京美術学校西洋画科を卒業。1933年光風会第20回展に出品し、K婦人賞を受賞。翌1934年光風会会員となる。また同年第15回帝展に初入選。1935年松田改組に伴う第二部会第1回展で、特選・文化賞を受賞するも、翌年官展と離れ、猪熊弦一郎・小磯良平らと新制作派協会を結成。以後、同会の主要メンバーとして活躍。戦前の版画に関する活動としては、1936年の第11回オリンピック芸術競技展(ベルリン)に《フットボール》(版種不明)を出品している。1985(昭和60)年11月18日東京都で逝去。【文献】『第十一回オリンピック芸術競技参加報告書』(大日本体育芸術協会 1936) /

『日本美術年鑑 昭和61年版』(東京国立文化財研究所 1988) (三木)

磯江 甫 (いそえ・はじめ)

大分県師範学校在学中に教師武藤完一の教えを受け、制作した銅版画が西田武雄発行の『エッチング』第26号(1934.12)に掲載された。この作品は武藤の斡旋で他の生徒と共に『大分日日新聞』に連載された作品の一枚。【文献】『エッチング』(加治)

五十川金作 (いそがわ・きんさく)

武藤完一が大分で発行した版画誌『九州版画』第1号(1933.9)に《橋のある風景》、第2号(1934.1)に《こよりの犬〔賀状〕》を発表する。同誌は『彫りと摺り』の改題であるがそのきっかけは、1933年8月に大分県師範学校で講師平塚運一による第2回版画講習会(「編集後記」『九州版画』1号)が開催されたからで、五十川も県内の教員であったことからこの版画講習会に参加したものと考えられる。後日平塚は武藤完一に宛てて、この第1号の感想を講習会の思い出と共に書き送っている。《橋のある風景》については、「ざくざくと丸のみで彫った処に一種の妙味は分かるが摺りがよくないので、それが十分發揮されておかない」などと版画制作の初歩的アドバイスをしている。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1(2002) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

磯田長秋 (いそだ・ちょうしゅう) 1880～1947

1880(明治13)年5月5日東京日本橋に生まれる。芝水章に狩野派、小堀鞆音に土佐派を学び、安田靉彦、今村紫らと紫紅会を結成。有職故実を研究、文展、帝展、新文展と官展にあって活躍する。1947(昭和22)10月25日千葉県船橋市で逝去。版画は下村観山、松岡映丘ら82名が各場面を1図ずつ担当し赤穂義士の事跡をまとめた豪華木版画集『義士大観』(1921年出版 義士会出版部 限定300部)に《隅田川舟中会議》1図。東京本郷湯島の画報社が1924年1月から12月まで毎月3点ずつ頒布した木版画集『大正震災木版画集』(長島鬼一・彫師、田村鉄之助・摺師)に、《運送馬車(京橋通)》《橋の袂(神田橋)》《愛宕山》《路上の残骸(浅草)》など6点の木版画がある。【文献】『忠臣蔵 近代木版画でたどる物語』(城西国際大学水野美術館 2009) / 北原糸子論文『描かれた関東大震災 - 絵巻・版画・素描 -』(ネット検索) / 『20世紀物故日本画家辞典』(美術年鑑社 1998) (岩切)

磯部忠一 (いそべ・ちゅういち) 1879～没年不詳

1879(明治12)3月15日東京に生れる。1905年から1906年にかけて美術文学雑誌として発行された『平旦』第5号(最終号 1906.4)に「磯部忠」の名前で木版《春の野》を発表。続いて、山本鼎、森田恒友、石井柏亭、坂本繁二郎らによって創刊された『方寸』第1巻第3号(1907.7)に《葵》(ジंक版)、第5号(1907.10)に《築地河岸》(木版とジंक版)、第3巻第1号(1909.1)に《尾上のかね》(木版)を発表した。その後、明治美術会の後身として1901年発足の太平洋画会に第1回展～第10回展まで連続して油彩画や水彩画を出品。また、1913年発足の日本水彩画会創立会員の一人として名を連ねる。ちなみに、1887年頃に印刷局図案官に磯部忠一なる人物がおり、石井柏亭との関係を考えて、こちらも同一人か。

【文献】『日本水彩画会第一回展覧会目録』(1913.6) / 『もうひとつの明治美術 - 明治美術会から太平洋画会へ -』図録(静岡県立美術館・他 2003) / 『創作版画誌の系譜』(樋口)

磯部光彦 (いそべ・みつひこ)

版木会が発行した創作版画集『版』第7輯〔特集〕スタンプ(1937.7)に2点、第10輯〔特集〕進軍譜(1937.10)に1点、第11輯漫画集(1937.12)に2点、第12輯賀状集(1938.1)に1点の木版画を発表する。版木会は同誌に掲載されている校章や題材から愛知県知多郡師崎町(現・南知多町)の学校(当時・師崎町立師崎中学校)の版画同好会と考えられる。なお、10輯には「磯部照彦」と記載されているが光彦の誤記と思われる。(加治)

井田有杜史 (いだ・ありとし)

大分県大野郡で生野正義ら教員仲間は版画誌『大野版画』(1933-1934)を発行する。その第3号(1934.5)に《母子草》、第4号(1934.7)に《どくだみ》を発表。その後、1935年8月に平塚運一と畦地梅太郎を講師に招いた九州版画協会主催の版画講習会に参加し、その時制作した作品《はうづき》が『九州版画』第8号講習会記念号(1935.10)に掲載されている。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1(2002) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

板 祐生 (いた・ゆうせい) 1889～1956

1889(明治22)年9月24日鳥取県生まれ。本名は愈良(まさよし)。教職の傍ら郷土玩具の収集をするなかで、しだいに失われていく古くからの姿を残すために謄写版による版画制作をはじめた。ロウ原紙を切り抜いて製版する技術を独自に洗練して、その作品を個人誌『富士乃屋草紙』や蔵書票、絵暦などのかたちで発表し、各地に支持者を得た。木版で制作した『版芸術』第40号(1935.7)「山陰道郷土玩具集」をはじめとする白と黒社での仕事、武井武雄の「榛の会」での活動を通じて創作版画家の間でも早くからよく知られ、評価が高かった。1956(昭和31)年2月5日逝去。【文献】黒水武夫編『後塵録』(日本謄写美術協会 1947) / 『銀花』68(1986) / 須永襄編『昭和堂月報の時代』(大日本印刷株式会社 ICC 本部 2000) (植野)

板倉 鼎 (いたくら・かなえ) 1901～1929

1901(明治34)年3月埼玉県北葛飾郡松伏町に生まれ、松戸に移り住む。1919年東京美術学校洋画科に入學し、岡田三郎助、田辺至に師事。在学中より帝展に2度入選。1924年同校卒業後、女流画家の昇須美子と結婚。須美子を伴って翌1926年に渡仏。パリでは斎藤豊作や岡鹿之助らと親交、サロン・ドートンヌ等に入選するが、1929(昭和4)年9月29日、28歳の若さでパリで急逝。10月1日に友人岡鹿之助らの尽力で葬儀が行われた。版画は田辺至の影響からか、美校在学中1921年から1922年にかけてエッチングを手がけ、《ギターひく女》《椅子に寄る女》《線路工事》などの作品がある。【文献】板倉弘子『板倉鼎 その藝術と生涯』(三好企画 2004) / 「松戸市公式ホームページ 板倉鼎」 / 『日本の版画 III 1921→1930』図録(千葉県美術館 2001-2002) / 『巴里憧憬 - エコール・ド・パリと日本の画家たち』図録(徳島県近代美術館 2006) (樋口)

板倉清三郎 (いたくら・せいざぶろう)

東京で平塚運一が版画の研究と普及のために発行した『版画研究』第1巻1号(1932.3)に《風景》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

板倉守雄 (いたくら・もりお)

版木会が発行した創作版画集『版』第5輯 春陽号(1937.5)、第6輯(1937.6)、第7輯 スタンプ〔特集〕(1937.7)、第10輯 進軍譜〔特集〕(1937.10)に木版画各1点を発表する。版木会は同誌に掲載されている校章や題材から愛知県知多郡師崎町(現・南知多町)の学校(当時・師崎町立師崎中学校)の版画同好会と考えられる。なお、第10輯には板倉「守男」と記載されているが「守雄」の誤記と思われる。(加治)

市川昶夫 (いちかわ・たけお)

多田北島主宰の作家と印刷者の協同団体である「実用版画美術協会」作家側同人。【文献】『美術新論』5-1(1930.1)(樋口)

市川西男 (いちかわ・にしお)

長野県下の教師の集りであった下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』第3号(1936.7)に《みよりの秋》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

一條成美 (いちじょう・なるみ (せいび)) 1877~1910

1877(明治10)年9月25日信州松本(東筑摩郡神林村)に生れる。松本中学退学。菊池容齋に私淑し独学。1897年長野県土木課製図係に勤務。長原止水の紹介で与謝野鉄幹を知り、1900年雑誌『明星』創刊と共に挿絵画家としてデビュー。同年11月『明星』8号の裸体画が発禁処分となり退社。その後『新声』、『新小説』、『女学世界』等で活動。その繊細な描写からなる浪漫調に、当時の青年層読者の人気を得て一世風靡。「セイビ」との呼称もあった。1910(明治43)年8月12日東京淀橋区柏木の自宅で逝去。中学期以来の友人に歌人・窪田空穂がいる。【文献】『松本平の近代美術展』図録(松本市美術館 2007)/岩切信一郎「一條成美考」『一寸』50(2012.5)(岩切)

一瀬 恒 (いちのせ・わたる)

1933(昭和8)年11月の新版画集団第3回展に木版画《髪》《卓》《沼》など7点と石版画《素描》を出品。また、同月発行の『新版画 Leaflet』第2号のアンケート「現代の版画に就て問を設けて諸家に訊く」に回答を寄せている。【文献】『新版画集団第三回展出品目録』/『新版画 Leaflet』2(1933.11)(三木)

市村雄造 (いちむら・ゆうぞう) 1907~1945

1907(明治40)年和歌山県新宮市丹鶴に生まれる。浜地清松、上野山清貞、牧野虎雄に洋画を学ぶ。1930年の1930年協会第5回展や1931・32年の第1・2回独立展などに入選。1933年には和歌山県の紀南地方の作家が結集した全熊野美術家協会の結成に参加。版画は同協会が主催した1934年の第2回全熊野美術展に油彩画10点とともに、《裸婦(その一)》《裸婦(その二)》など6点を出品している。その後は旺社社展を中心に発表を続け、1936年の第4回展で社友、1938年の第6回展で会員に推挙され、1942年の第10回展で岡田賞を受賞した。他に1935年の第二部会第1回展、1938年の第2回新文展

に出品。1940年には和歌山県美術協会の会員になっている。1945(昭和20)年12月8日新宮市で逝去。【文献】『第二回全熊野美術展目録』(1934)/『和歌山県史 人物』(1989)(三木)

井出則雄 (いで・のりお)

1937年当時、東京美術学校彫刻科塑造部3学年で、同校版画教室エッチング部に所属。絵画グループ「磁座」、「汎」造形会、「新浪漫派」などに参加する。【文献】『エッチング』57(1937.7)/『グループ〈貌〉とその時代展』図録(郡山市立美術館 2000)(樋口)

井手無一 (いで・むいち)

戦前に制作したと思われる《〔鉄塔のある風景〕》を描いたエッチング作品(武藤完一へ献呈、「M.Ide」のサイン)が知られる。台紙余白には「福岡県田主丸町 井手無一」との記載あり。【文献】「武藤完一コレクション」(樋口)

糸居七郎 (いとい・しちろう)

1914年3月上野公園で開催の東京大正博覧会に《祈願》と題する西洋人による油絵を木口にした西洋木版(木口木版)を出品。【文献】青木茂「芝築地派と峰島尚志」『町田市立国際版画美術館紀要 第3号』(1999.3)(樋口)

伊藤一郎 (いとう・いちろう) 1906~没年不詳

1906(明治38)年5月10日秋田県に生まれる。別名は真人(まさんど)。1926年秋田県師範学校を卒業。木版画を独習し、1929(昭和4)年の日本創作版画協会第9回展に《夜の静物》を出品。中断があり、1940年の日本版画協会第9回展《鋸屑運ぶ人々》、1942年の第11回展に《製炭夫(早春)》《製炭夫(冬)》を出品。1943年には版画奉公会の会員になるが、当時の住所は秋田県南秋田郡馬場目村。また、同年の第12回展に《奉戴日の炭焼小屋》を出品。翌1944年に会友に推挙され、同年の第13回展に《学童木炭搬出之図》を出品している。戦後は1946年の第14回展に「真人」の名で《炭取》《寒台》《冬の鳥海山》を出品。この時に会員に推挙されたものと考えられる。翌年の第15回展は「一郎」の名で《茶瓶の図》《三角山の残雪》を、1950年の第18回展からは「真人」の名で出品を続けた。1995年に日本版画協会を退会。日本水彩画展にも1948年から1952年まで出品している。【文献】『日本創作版画協会第九回展展覧会目録』(1929)/『日本版画協会展出品目録』/『自筆略歴』(日本版画協会蔵)/『エッチング』123(三木)

伊藤英治 (いとう・えいじ)

静岡で文芸同人誌として出発した中川雄太郎編『かけた壺』(1930~1934)は第14号(1931.11)から本格的に文芸と版画の同人誌として活動を始める。同号に扉絵《ダリヤ》と《風景》《カット》、第15号(1932.1)には《秋》を発表する。《秋》の作者言では「黄金色に実った田園を見ると限りない汗の滴と人々の活躍とを思ひ出させる、そして其の風景をいつ迄もいつまでも取って置きたいのである」とコメントしている。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

伊東英泰 (いとう・えいたい) 1876~没年不明

1876(明治9)年1月10日に長崎市に生れる。名は義重(よししげ)。右田年英の門下(鱈崎英朋の兄弟子)、

及び村瀬玉田、川端玉章にも師事。人物、花鳥、山水を能くし博覧会・共進会等に出品。優賞を受く。帝国絵画協会会員、天心会幹事。『東京日々新聞』専属挿絵画家、『新小説』の口絵も担当。四谷区塩町三丁目45番地。【文献】『帝国絵画名鑑』（大正元年版）（穂俊彦氏からの情報提供を得た）（岩切）

伊東キツ（いとう・きつ）

大分の武藤完一が発行した版画誌『九州版画』第1号（1933.9）の表紙絵は伊東の作品《少女像》で飾られている。『彫りと摺り』が改題されてこの『九州版画』が生まれたが、そのきっかけは1933年8月大分県師範学校において講師平塚運一による第2回版画講習会（「編集後記」『九州版画』1号）が開催されたことである。伊東は大分県宇佐郡四日市（現在の宇佐市）に在住し、教員であったことから版画講習会に参加したと考えられる。後日、平塚はこの第1号の感想を講習会の思い出と共に書き送っている。伊東の表紙絵について「鼻の両側の（眉から続いてゐる）線は一寸目ざわりだが、大体にさう悪くない。模造鳥の子に摺った一種下手な味はいも捨て難い」と評している。その後も版画の制作を続け、大分県中津の仲間が発行した版画と詩歌の同人誌『鳩笛』第1輯（1934.1）に《静物》と《賀状》、第2輯（1934.4）には《葱坊主》を発表している。伊東きつ子との表記もあり。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1（2002.9）/『創作版画誌の系譜』（加治）

伊東京一（いとう・きょういち）

青森での最初の版画誌『緑樹夢』（1930～1931）の同人佐藤米次郎らを中心に版画誌『彫刻刀』（1931～1932）は発行された。その第1号（1931.6）に《閑日》、第2号〔1931〕に《陸奥青森十景》を発表する。この《陸奥青森十景》は10景を佐藤米次郎や関野準一郎など同人10人で分担している。【文献】『緑の樹の下の夢』図録（青森県立郷土館 2002）/『創作版画誌の系譜』（加治）

伊藤健乃典（いとう・けんのみち）

大分県立日田中学を卒業し、日田漆器株式会社に入社。在学中から宇治山哲平に木版画を学び、1933年4月に宇治山を中心に発行された創作版画誌『朴の木』に参加。その後、1934年からは武藤完一の主宰する『九州版画』の会員となり、第5～9号（1934.10～1936.10）と24号（1941.12）に作品を発表。第24号に掲載されている会員名簿では、「福岡市福岡日々新聞絵画部」の所属になっている。公募展へは、1938年の造型版画協会第2回展に《水郷月影》《愛宕山》《避難所》が初入選。その後、1941年の第5回展に《光芒》《古小鳥》《開発》、1942年の第6回展に《磊山》《峻崖》を出品した。日本版画協会には、1940年の第9回展に《廢道》《新道》が入選。1944年に会友に推挙され、同年の第13回展に《赤山緑化》《夜ノ訓練》（前線将士慰問作品）を出品した。また、国画会展にも応募し、1942年の第17回に《崖》《峠》、1943年の第18回展に《峭壁》、1944年の第19回展に《層崖》をそれぞれ出品している。戦後は、1949年の第23回国画会展と日本版画協会第17回展に再び応募。日本版画協会展では、改めて会友に推挙され、翌年会員になるも、1960年退会。退会時の住所は、福岡市藤崎町2-85。【文献】「造型版画展目録」/「日本版画協会展出品目録」/「国画会展出品目録」/『創作版画誌の系譜』（三木）

伊藤重夫（いとう・しげお）

本名吉川審。版画誌『爆竹』（古仁所卓・編輯兼発行者、東京府下巢鴨）同人で、第3号～第7号（1929～1930.5）に《夜明け》《ウイスキーの瓶》《五反田附近》《数寄屋橋暮景》《ピラはり》の木版5点掲載のほか、第6号（1930.3）は表紙絵を担当。その他1930年頃制作の木版《男》などがある。『爆竹』の目次表記では、第3号は「伊東重夫」、第4～7号は「伊藤重夫」となっており、第3号の「伊東」の表記は誤記と思われる。【文献】『創作版画誌の系譜』/「滝沢恭司 小野忠重旧蔵 近代日本版画コレクションについて」『町田市立国際版画美術館紀要 第17号』（2013.8）（樋口）

伊藤正二（いとう・しょうじ）

慶応義塾普通部在学中、西田武雄が発行した『エッチング』第60号（1937.10）に銅版画（題名不詳）を発表。【文献】『エッチング』（加治）

伊藤小坡（いとう・しょうは） 1877～1968

1877（明治10）年4月24日、三重県宇治山田の猿田彦神社宮司家、宇治土公家に生まれる。旧姓二見佐登（さと）。閨秀画家。森川曾文門下、後に谷口香嶠に師事し「小坡」の雅号を受ける。1908年伊藤鷺城と結婚。1915年文展初入選。以降文展・帝展で活躍。当世風俗美人画から歴史風俗の美人画へ移り品格ある理想の女性を追求した。明治・大正・昭和と挿絵も描いた。版画例では1915年『現代俳画集（春之部）』（俳画堂）に俳画挿絵（木版）1図。下村観山、松岡映丘ら82名が各場面を1図ずつ担当し赤穂義士の事跡をまとめた豪華木版画集『義士大観』（義士会出版部 限定300部 1921）に1図あり。1968（昭和43）年1月7日逝去。【文献】『20世紀物故日本画家事典』（美術年鑑社 1998）（岩切）

伊藤眞一（いとう・しんいち）

愛知県半田の教師仲間による版画団体「版刀会」が発行した版画誌『運』第10号〔1935〕に《賀状》を発表する。現在『運』は5～7、10号（1931～1935）のみを確認。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

伊東深水（いとう・しんすい） 1898～1972

1898（明治31）年2月4日、東京深川（西森下町）に生れる。本名一（はじめ）。10歳で同じ深川の東京印刷株式会社分工場の活字工。1911年、13歳の時に同社日本橋本社図案研究生となり、同年社顧問の結城素明の紹介で鑄木清方に入門し「深水」の号を与えられる。翌12年の異画会展で初入選、14歳での入選が話題になる。その後、異画会、再興日本美術院で活躍。清方画塾の柱となって「郷土会」でも会の中心となって活躍。最も注目すべきは、版元渡辺庄三郎主宰の「新板画運動」（現代浮世絵の制作をめざす）での活動である。1916年7月試作《対鏡》を制作。この年から6年間、展覧会出品を控え、新聞連載小説や雑誌連載小説の挿絵版下画に専念すると共に、新板画制作にも精力を注ぎ、当世女性の《遊女》《浴後》《春》《ひでり雨》。風景では《泥上船》《多摩川原の夕》《真昼》、《近江八景》シリーズ8枚と、1916年暮から1918年の僅か2年で15点を制作。こうした積極的な挑戦は、かつてない新たな技術開発と新たな趣向を盛り込み、「新板画」構想の具現化が顕著となった。これら主要版画作品は渡邊版画店からの発行である。1929年からの会員頒

布『現代美人集』シリーズ12枚は第1集、第2集と好評で1936年に完結。その後、昭和風景版画の『大島十二景』、『伊豆八景』、『富士三景』がある。また、1952年無形文化財技術保存記録木版画《髪》の制作もある。国際的には版画に注目が集まり「新板画の美人板画・深水」地位は揺るぎない。1972(昭和47)年5月8日逝去。【文献】『年譜』『伊東深水全集』第6巻(集英社 1982)(岩切)

伊藤誠一(いとう・せいいち)

名古屋の創作孔版画家。【文献】若山八十氏・文「思い出の孔版家たち」(田村紀雄・志村章子編著『ガリ版文化史』新宿書房 1985)(樋口)

伊藤晴雨(いとう・せいう) 1882～1961

1882(明治15)年3月3日東京浅草に生まれる。本名は一(はじめ)。父は彫金師。木版の彫師の許に奉公し絵の模写など独学で学ぶ。明治40年代頃には『読売新聞』、『やまと新聞』等の挿絵を担当し、挿絵画家として時代考証に長けて風俗研究家である。また戦後の1950年頃からの『奇譚クラブ』、『あるすあまとりあ』等に回想記がある。『挿絵節用』、『風俗野史』の著書でも知られる。版画では版元企画出版以外にも、私家版のものも多い。刑罰図、責め絵を石版刷とか、木版凸版でのものなど効果的な版種を選んで印刷にも厳しい目を向けている。因みに《東京都足立区花畑町B 29 無名戦士之墓》(伊藤虎二彫・矢下不倒摺、1946年跡部欽也版、木版多色、非売品)といった依頼版画にも筆を執っている。1961(昭和36)年1月28日東京都文京区駒込動坂で逝去。(岩切)

伊藤総山(いとう・そうざん) 1884～没年不明

詳細は不明だが、1909年頃に花鳥版画を出版(版元不明)。版元渡邊庄三郎のところから1919年～26年頃まで主に三切サイズの版画を出している。【文献】『近代美人版画全集』(2000.10 阿部出版)(岩切)

伊藤孝之(いとう・たかし) 1894～1982

静岡県長上郡蒲村下(現・浜松市)に生まれる。1913年県立浜松中学卒業。京都高等工芸学校図案科で日本画を竹内栖鳳に、洋画を都鳥英喜に学ぶが3年で中退し、1919年東京美術学校日本画科に入学。結城素明に師事。1919年卒業。1927年に帝展に初入選、以降日本画家として制作を続けた。在学中より『コドモノクニ』などの子供向け雑誌に挿絵を描くほか、渡辺庄三郎の「新板画運動」に参加し、1922年に渡辺版画店から木版《隅田村晩秋》《小台の渡し》を発表。以来、1960年代頃まで主に渡辺版画店より伝統形式による風景版画60点余を刊行する。少ない色数ですっきりと整理された風景画が特長といえる。また、平行して1923年から自らの刀で刻んだ「自画自刻」の木版《植物園》《谷中の塔》《お茶ノ水ニコライ堂》なども同じく渡辺版画店から出している。「孝之」あるいは「孝人」の作名で、同じ版木を用いて、墨・藍・濃茶・薄茶の異なる摺色の「自画自刻」の木版作品20余点を残す。1944年、空襲により東京の居宅や作品を全て失い、弘前に疎開。1962年再び東京に戻り、世田谷区奥沢に住む。1965年「木葉会」を主宰。1967年創作画人協会の結成にかかわり、同協会理事を務める。1982(昭和57)年5月9日逝去。【文献】『懐かしい風景 伊東孝之木版画展』図録(山梨県立美術館 1997)/『日本の

版画 1921～1930』図録(千葉市立美術 2001)(樋口)

伊藤武弘(いとう・たけひろ)

1937年8月青森師範図書教室で行われた今純三の夏期図書講習会に参加したとの記録が残る。【文献】江渡益太郎『青森県版画教育覚え書』(津軽書房 1979)(樋口)

伊東忠太(いとう・ちゅうた) 1867～1954

1867(慶応3)年山形県米沢に生まれる。建築家。明治神宮、築地本願寺、震災祈念堂、大倉集古館など設計。1943年文化勲章受章。1954(昭和29)年4月7日逝去。版画は、1920年国粋出版社から軽妙でユーモラスな風刺画の『阿修羅帖』5冊(木版100点)を出版。また同じく国粋出版社の雑誌『国粋』第1号、第2巻7号、9～12号、『さいらく』(『国粋』改題)第3巻第1号、2号(1920.10～1922.2)などに木版表紙絵や挿絵、文章などを寄せる。【文献】『みづゑ』180(1920.2)/柏木博『近代日本の産業デザイン思想』(晶文社 1987)/『版画堂目録』97(2012.9)(樋口)

伊藤統一郎(いとう・とういちろう)

東京で発行されたプロレタリア美術系の版画誌『爆竹』第3号[1929]に《カット二題》、第4号(1929.10)に《インク瓶》、第5号(1930.1)に《風景》を発表する。第3号の情報は『爆竹』第4号(1929.10)の田中比左良による「第3号を見て」からのものであり、第7号(1930.5)まで確認されているが、第1～3号は現在のところ未確認である。第5号の「感想」で平塚運一は《インク瓶》について、「少しギゴチないところがあって、それが反って一種の素朴な味を見せて居る。唯バックの斜線はかたいものである」と評している。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

伊藤利夫(いとう・としお)

長野県北安曇郡大野に生まれる。長野県師範学校2部2年に在学中、生徒が発行した版画誌『樹水』第1号2598年版(1938)に《御経堂》を発表する。1939年3月同校を卒業。1950年当時は長野柳町中学校に勤務。【文献】『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950)(加治)

伊藤波郎(いとう・はろう)

青森県黒石で安藝蜻一が仲間と発行した版画誌『はなが』第2号(1933.2)に《駅の宵》《夢想》、第3号(1933.3)には《雪の山》《雪の朝》と裏表紙を発表する。(加治)

伊藤勉黄(いとう・べんおう) 1917～1992

1917(大正6)年1月5日、静岡県志太郡大井川町に生まれる。本名は勉。60歳から画名を「勉黄」とする。志太郡准教員養成所、国学院大学神職養成所に学ぶ。1935年静岡で発行の版画グループ童土社の同人版画誌『ゆうかり』の存在を知り第26号から第30号の終刊まで同人として参加。1939年5月、当時上海の南京特務機関宣撫班だった弟の呼びかけで上海に渡り、上海牲畜市場勤務などの傍ら上海で絵画グループ玄黄社を結成していた朝井閑右衛門や田川憲らと知り合い、全上海展に版画を出品した。これが契機となり中国木刻作者協会の作家たちと交遊。この頃、朝井閑右衛門の下絵を木版画に彫り10枚1組の絵はがきなども制作する。1946年に帰

国。1949年日本版画協会展に初出品の《夕映え》《緑林》で根市賞受賞し、恩地孝四郎の知遇を得る。1951年同协会会员。その後国画会にも出品し、国画奨励賞、会友優作賞などを受賞し1959年国画会会員となる。1960年代から70年代にかけて木版画からリトグラフ、エッチング、孔版、紙版の制作へと版種を広げ、さらに80年代にはコンピューター・アートを手掛けるなど先鋭的画風を追求した。1980年静岡県文化功労者。1992(平成4)年8月20日逝去。【文献】『静岡県版画協会第50回記念版画集』(静岡県版画協会 1985) / 『静岡の創作版画』図録(静岡県立美術館 1991) / 『伊藤勉黄の藝術』(静岡新聞社 1995) (樋口)

伊東正明 (いとう・まさあき)

朝鮮の釜山で発行された版画誌『朱美(之集)』(清水完治発行)第1冊~第3冊(1940.5~12)に《仁王尊》《將軍標》《眼鏡をかけた男》の多色木版3点を制作。当時、朝鮮全州府全州師範学校勤務と思われる。なお、大分県出身で、一水会会員の洋画家・伊東正明(1913~1988、1934年東京美術学校図画師範科卒業、帝京大学教授)と同一人物かは未確認。【文献】『朱美通信 二』(1940.8) / 『創作版画誌の系譜』 / 『20世紀物故洋画家事典』(美術年鑑社 1997) (樋口)

伊藤真人 (いとう・まさんど) →伊藤一郎

伊東基夫 (いとう・もとお)

版画誌『版藝術』第15号(1933.6)に《漁夫(三河風俗)》を発表する。『版藝術』は料治熊太が刊行した版画誌の中の1誌で、料治の代表的なもう1誌『白と黒』が自画自刻自摺を基本としていたのに対し、版画の普及を意図して木版を機械刷することにより発行部数を増やすという方法で5年間に全58号(1932-1936)という大規模な刊行となった。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

伊藤雄半 (いとう・ゆうはん)

1930年代に《日光神橋》《[宮島風景]》などを制作したと思われる「伊藤・Y」は、伊藤雄半(1882~1951)と云われているが、詳細は不明。これらの作品の後摺りが、東京都台東区鶯谷の版元・西宮興作(西宮版画店)から刊行されている。【文献】『版画堂目録』3(1988.10) / Andreas Grund「A Visit to Nishinomiya Woodblock Print Shop or Nishinomiya Hangaten」(ukiyo-e-gallery2008) (樋口)

伊東芳雄 (いとう・よしお)

大分の武藤完一が発行した『木版』は全国教員仲間の版画同人誌であり、その第4号(1930.10)に《窓辺》を発表。作者言では「放課後の静かな教室の片すみで、オルガンのある小春日和の窓です。一人で教室に居る時に感じたまゝを版にしたのみです」とコメントしている。【文献】池田隆代著「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1(2002) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

伊藤義雄 (いとう・よしお)

神戸の版画誌『HANGA』第12輯(1927.10)に《静物》を発表する。『HANGA』(1924~1930)は山口久吉が版画普及のために「HANGA NO IE」よりを発行した。良

質の作品であれば、有名無名を問わず掲載するという編集方法が取られている。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

伊藤義輝 (いとう・よしてる)

北海道で創作版画を試みた最初期の一人。1924(大正13)年の『詩と版画』第8輯に木版画《水門》を発表。翌1925年6月に北海道帝国大学学生の相川義輝、外山卯三郎らと札幌詩学協会を結成し、詩と版画の同人誌『さとぼろ』(1925.6~1929.9 全29冊)を創刊。また、10月には北海道最初の本格的な創作版画展である「札幌詩学協会第1回版画展」(札幌商業会議所)を開催し、自身も《山の学校》《ゴッホの顔》など16点を出品している。『さとぼろ』には第28号(1929.6)まで毎号版画や文を発表したほか、1927年の日本創作版画協会展第7回展に《静物小品》《机上静物》(各木版)《静物》(リノカット)、翌1928年の第8回展に《風景》《樹》(各木版)を出品。その後は版画制作から離れ、農林省統計事務所長などを歴任した(『版画名家覧』による)という。【文献】今田敏一『北海道美術史』(北海道立美術館 1970) / 『創作版画誌の系譜』(三木)

伊藤 廉 (いとう・れん) 1898~1983

1898(明治31)年10月7日名古屋市に生まれる。本名の読みは「きよし」。1920年東京美術学校西洋画科に入学。在学中の1923年二科会第10回展に初入選。1925年同校を卒業し、1927年から1930年まで渡欧。帰国の年、二科展に滞欧作を特別出品し、二科賞を受賞するも、独立美術協会の結成に参画。翌1931年の第1回展から1937年の第7回展まで連続して出品。1943年からは国画会展に会員として出品。1966年まで出品を続け、1973年退会。その間、1946年東京美術学校油画科講師、1949年東京藝術大学助教授、1954年同校教授、1961年同美術学部長となり、1966年退官。同年から1972年まで愛知県立芸術大学教授を務め、後進の指導にあたりとともに、版画研究室創設に尽力した。また、自らもエッチングを制作し、『日本版画美術全集 第7巻 現代版画I』には戦前のエッチング作品《闘牛》(1939)が紹介されている。なお、1936年9月の『新版画リーフレット』第4号(第6回展号)に「版画に就て」を寄稿しているが、この時点ではまだ版画に着手していないようだ。1969年中日文化賞を受賞。1983(昭和58)年1月24日名古屋市で逝去。【文献】『日本美術年鑑 昭和59年版』(東京国立文化財研究所 1986) / 『新版画リーフレット』第4号(新版画集団 1936.9) (三木)

伊奈源太郎 (いな・げんたろう)

明治に発行された石版印刷業界誌『虹』第1巻6号(1908.7)に石版画《弱肉強食》《今朝の春》《初午》《花見》《ふじ》《茶摘》《夕立》《迎ひ火》の8点と第1巻7号(1908.8)に石版画《模範的労働》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

稲垣清松 (いながき・きよまつ)

1936(昭和11)年の日本版画協会第5回展に木版画《T氏の像》《ざくろ》が初入選。以後、1941年の第10回展まで連続して出品し、1944年には会友に推挙されたが、会からの通知の郵便は不着になっている。また、国画会展版画部にも、1939年の第14回展から1941年の第16回展まで続けて出品した。出品時の住所は名古屋

内。1943年には日本版画奉公会の会員になっているが、この時の住所は愛知県碧海郡矢作町となっている。【文献】「日本版画協会展出品目録」「国画会展出品目録」/『エッチング』126（三木）

稲垣耕四郎（いながき・こうしろう）

1929（昭和4）年京都市立美術工芸学校絵画科を卒業。1931年6月に京都の日本画、洋画、版画、彫刻、工芸の青年美術家が集まった各人社の結成に参加。翌年の第1回展から1937年の第5回展まで版画を出品（推定）。第1回展出品の《風景》、1935年展（4回展か）出品の《母島風景》の図版は、『みづゑ』第326号（1932.4）と第370号（1935.12）にそれぞれ掲載された。また、1932年の『版藝術』9号（「全日本版画家年賀状百人集」）に版画を寄せ、1933年の第8回国画会展に《山（試作）》、1935年の第10回国画会展に《大島風景》と第4回日本版画協会展に《南洋の海底》を出品。出品時の住所は東京市渋谷区千駄谷5ノ905土屋方となっている。【文献】「日本版画協会展出品目録」「国画会展出品目録」/『みづゑ』326・370 / 『同窓会名簿 明治13～昭和46』（京都市立芸術大学美術学部同窓会 1971）/ 『創作版画誌の系譜』（三木）

稲垣稔次郎（いながき・としじろう） 1902～1963

1902（明治35）年3月3日京都市に生まれる。父は日本画家・工芸图案家の稲垣竹埴。兄は早逝の日本画家・稲垣仲静。1922年京都市立美術工芸学校图案科を卒業後、松坂屋京都支店图案部に10年ほど勤務の後、1931年退職、染色工芸に専念する。1939年に描いた《西瓜の図屏風》が1940年国画会賞受賞し会員となる。第4回文展（1941）で特選。戦後は第1回日展（1946）で特選。1947年国画会を退会して富本憲吉らと新匠美術工芸会の結成に参加し、亡くなるまで出品を続ける。1950年から京都市立美術大学教授。1962年重要無形文化財保持者（人間国宝）の指定を受け、翌1963（昭和38）年6月10日に逝去。版画は1935年武井武雄主宰「版交の会」（第3回からは榛の会と改称）第1回からの会員で合羽版の年賀状を制作。1951年頃より木雲木出版社から型染絵原図による木版画を出版した。【文献】「榛の会」会員名簿（1935～1953）/ 乾由明編『稲垣稔次郎作品集』（求龍堂 1980）/ 『稲垣仲静・稔次郎 兄弟展』図録（京都国立近代美術館 2010）/ 市道和豊著『奇跡の成立』榛の会・昭和21年（室町書房 2008）（樋口）

稲垣知雄（いながき・ともお） 1902～1980

1902（明治35）年9月4日東京市小石川に生まれる。1923年大蔵高等商業学校を卒業し、株式会社浅野造船所へ入社。『詩と版画』第3輯（1923.7）に木版画《房州風景》を投稿し、平塚運一の評とともに掲載される。同年、詩と版画社の会合で恩地孝四郎に会い、以後師事するようになる。翌1924年の第6輯（1924.7）にも《爆破のあと》が収録され、同年の詩と版画社第1回展（京都）にも参加。この年の日本創作版画協会第6回展に《如水館》《静物》を出品し、初入選。以後、1929年の第9回展まで連続して出品。1928年には会友に推挙されている。その間、『HANGA』（神戸・版画の家）の第6、9・10合併号、10、11、14輯（1925.6～1928.11）に作品を発表したほか、1928年の春陽会展第6回展に《椿》《萬年青》、翌年の第7回展に《四ツ木風景》を出品している。1929年

浅野造船所を退社。商業美術家協会研究所で学び、翌年図案社を開業。1931年の日本版画協会第1回展には会友として出品。翌1932年会員に推挙され、戦前は第2～5回展、第9～12回展、パリ展、アメリカ巡回展、ジュネーブ展などに出品。1938年の第7回展からは会務委員を務めた。また、1935年からは京北実業学校（後の京北商業高等学校）の商業美術科教員になり、1959年まで教えている。戦後は、恩地孝四郎らによる日本版画協会の再建に協力し、1946年の第14回展から出品。1947年から会務委員、後に理事として会の活動を支え、1975年名誉会員。亡くなる年の1980年第48回展まで出品した。また、1948年からは国画会展にも出品するようになり、同年の第22回展で国画奨学賞を受賞。翌1949年に会友、1956年に会員になったほか、1957年の第1回東京国際版画ビエンナーレ展などの国際展にも数多く出品した。作品は木版の他、戦後はステンシル版も制作。都市風景も描くが、1951年に始まる「猫」をモチーフとした作品は、稲垣の代表的連作として良く知られている。最後まで版画界の第一線で活躍し、1980（昭和55）年5月14日東京都で逝去。【文献】『稲垣知雄全版画集』（形象社 1982）（三木）

稲田乙彦（いなだ・おとひこ）

『仮面』第19号・20号（1914.9・10）の扉絵に自画自刀の木版画《[人物]》《壺を持てる女》を制作。『仮面』消息欄には、「新しい計画と云へば、この頃、長谷川、稲田、永瀬諸氏の手でいろいろ新しい企てが進行中である」「店（夜店アカシア）の奥、たった一つのアセチレン瓦斯の点いて居る下に、香り高いいろいろの品が、やさしい温を帯びて浮かんだように並んで居る。永瀬だの稲田だのという不器用さうな男が、どうしてこんなうまい物を作るかと怪しまずには居られない」と記されており、稲田と長谷川潔や永瀬義郎の親交が窺われる。【文献】『仮面』19～21（中興館 1914.8～10）（樋口）

稲田雅一（いなだ・まさかず）

1936年8月の西田武雄を囲む名古屋エッチング座談会に参加。名古屋エッチング協会創立会員。【文献】『エッチング』47（1936.9）（樋口）

稲葉亨二（いなば・きょうじ）

1933（昭和8）年1月の白日会第10回展に木版画《老太太（ラウタイタイ）》《婦女（フーニユイ）》を出品。また同年、料治熊太の主宰する『白と黒』第31号（1933.1）に《満州女》、『版藝術』第15号（1933.6）に《娘（満州風俗）》、第18号（1933.9）に《娘々泥人》をそれぞれ発表。その他、1936年4月の『みづゑ』第374号に魯迅の木刻運動を紹介する論文「支那創作版画界の動静」を、同年10月30日・11月1日の『満州日日新聞』に「版画愛好家としての魯迅」を発表している。【文献】『白日会展総出品目録〈第1回～第59回〉』（白日会 1984）/ 『創作版画誌の系譜』/ 『中国版画研究』創刊号（1993.4）（三木）

稲葉元彌（いなば・もとや）

1920（大正9）年7月に札幌で開かれたオーク画会第1回展に木版画（3点か）を出品。当時、札幌鉄道局に勤務する。【文献】『みづゑ』187（1920.9）（三木）

稲見秀三 (いなみ・しゅうぞう)

慶応義塾普通部3年在学中、西田武雄が発行した『エッチング』第61号(1937.11)に銅版画《室内》を発表。第3回目となる慶応義塾普通部エッチング作品展において展示された作品であり、同誌で紹介された。西田は稲見の作品について「非凡ある運針の妙、敬服に値する」(『エッチング』60号 1937.10)と評している。【文献】『エッチング』(加治)

稲村退三 (いなむら・たいぞう)

1937年11月に東京の日本橋城東小学校で開催された教師対象の木版画講習会(講師:平塚運一)に参加。その記念版画集『日本橋版画』[創刊号]版画講習会記念号(1937.12)に《賀状》を、第2号(1938.1)には《たすき反り》を発表する。当時日本橋区久松小学校に勤務しており、同校は西田武雄の日本エッチング研究所プレス機の所有者(1934年から1943年頃まで確認)になっているところから銅版画も制作していたと考えられる(『エッチング』16 1934.2)。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

乾 丈夫 (いぬい・たけお)

1937(昭和12)年の第12回国画会展に木版画《川岸》を出品。当時の住所は東京市四谷区仲町3ノ23。【文献】『第十二回国画会展覧会目録』(三木)

犬塚苔翠 (いぬづか・たいたすい)

1929年に酒井川口合版で《ダリア》《はげいとう》《紫陽花》《あさがお》など「花」を題材にした木版画を制作。但し、略歴など詳細は不明。(樋口)

井上亀太郎 (いのうえ・かめたろう) 1904～1962

1904(明治37)年愛知県碧海郡棚尾町(現・碧南市)に生まれる。1922年愛知工業学校図案科(現・愛知工業高等学校)を卒業。東京美術学校への進学を希望したが、親に反対されたため断念し、郷里で洋画の勉強を続ける。この頃、愛知県岡崎では西洋画への関心が高まり開催された岡崎美術展覧会に作品を出品。1925年には村松隆次や小野英一らが発行した版画誌『試作』の同人となり、創刊号(1925.6)に《街の歌》、第1年2号(1925.8)に《いこひ》《挿画「習作」》を出品する。1927年からは地元棚尾尋常高等小学校に勤務。1945年に退職し、その後は農業を生業とする。1962(昭和37)年に逝去。【文献】『近藤孝太郎とその周囲』図録(岡崎市美術館 1983)/『創作版画誌の系譜』(加治)

井上 茂 (いのうえ・しげる)

1923(大正12)年の日本創作版画協会第5回展に木版画《顔の習作》、1927年の第7回展に《田植》《Aの肖像》を出品。出品時の住所は、第5回展が神戸、第7回展が大阪。【文献】三木哲夫「[資料]日本創作版画協会資料総出品目録」『和歌山県立近代美術館紀要 第2号』(和歌山県立近代美術館 1997)(三木)

井上垂穂 (いのうえ・すいほ)

版画誌『白と黒 第1次』の第4号(1930.6)に《童女》、第5号(1930.7)に《猫》を発表する。『白と黒』は料治熊太が発行した版画誌の中の1誌で、自画自刻自摺を基本としており、再刊(第2次)、第3次あわせると

全59号(1930-1937)にも及んだ。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

井上毅 (いのいえ・たけし) →井上富峰

井上常太郎 (いのうえ・つねたろう)

1918(大正7)年京都市立美術工芸学校絵画科を卒業。京都市立絵画専門学校絵画科に進み、日本画を学ぶ。1921年同校を卒業。1932年11月の第1回関西創作版画展(京都)に《おもちゃの犬》、翌1933年1月の京都創作版画会第3回展に《おもちゃの犬》《子供と犬》《白玉》を出品した。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合資料館紀要』第12号(1984)/『同窓会名簿 明治13～昭和46』(京都市立芸術大学美術学部同窓会 1971)(三木)

井上豊久 (いのうえ・とよひさ) 1914～1998

1914(大正3)年3月4日京都市に生まれる。1933年立命館大学卒業。徳力富吉郎に木版画を学び、1932年の第3回京都工芸美術展に入選(作品名不明)したほか、同年の第1回関西創作版画展(京都)に《風景》、1933年の京都創作版画会第3回展に《港内》《風景》《海岸》を出品。徳力の主宰する丹緑会編の『版 小品集』(発行年不明)にも作品を発表している。日本版画協会には、1933年の第3回展に《工場風景》《工場》《魔除け面》が初入選。以後、戦前は第4、5、9、10回展に出品。1944年には会友に推挙されるが、出征中であった。その間、1935年の第1回京都市美術展に《面》を、1937年の第12回国画会展に《静物》を出品している。戦後は京都の公共企業体に勤めながら作品を制作(1969年まで)。1946年日本版画協会会員に推挙されるも出品に中断があり、1958年に会友、1979年に再び会員に推挙されている。また、1951年に浅野竹二、徳力富吉郎らと京都版画協会を結成。1958年の第1回グレンヘン色彩版画トリエンナーレ(スイス)にも出品。1968年の第20回京展からは出品委嘱として晩年(45回展までは確認)まで作品を発表した。1998(平成10)年8月逝去。自宅は京都市東山区本町8丁目。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合資料館紀要』第12号(1984)/『日本版画協会出品目録』/『自筆略歴』(日本版画協会蔵)/『京都の近代版画一丸山応挙から現代まで』図録(京都市美術館 1986)(三木)

井上半兵衛 (いのうえ・はんべえ)

1929(昭和4)年2月の京都創作版画会第1回展に木版画《人物》《風景》《鯉》、会期不明の第2回展(1930頃か)に《海老》《椿》《猫》、1933年1月の第3回展に《海老》《雛とり》(2点)をそれぞれ出品した。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合資料館紀要』第12号(1984)(三木)

井上富峰 (いのうえ・ふほう)

未来派美術協会の後藤忠光が主宰する「青美社」の同人であり、1921年4月創刊の版画と詩の雑誌『青美』に、象徴主義、表現主義に感化された《裸体》《習作》《永遠に》《悩ましき夜》の4点の木版画を寄せた。その後『青美』を合併した文芸雑誌『曙光』3号(1922年10月)に、井上毅という人物による表現主義的作風の《新しき女》が口絵に図版掲載されており、同一人物と推定できる。

また井上毅は、後藤忠光が出品した1922年2月の日本創作版画協会第4回展にも木版画《影》を出品している。この後の消息は不明。【文献】『町田市立国際版画美術館紀要』第3号(1999) / 『大正期新興美術資料集成』国書刊行会 2006) (滝沢)

井上路二 (いのうえ・みちじ)

1922(大正11)年2月に神戸で開かれた神戸弦月画会主催創作版画会に木版画《女の顔》《無題》を出品。当時の住所は神戸。【文献】『創作版画展覧会目録』(〔神戸〕弦月画会 1922) (三木)

猪熊弦一郎 (いのくま・げんいちろう) 1902～1993

1902(明治35)年12月25日香川県高松市に生まれる。本名、玄一郎。1922年、東京美術学校西洋画科に入学し藤島武二教室に学んで油彩画家となった。1926年第7回帝展に《婦人像》が初入選、この年健康を害して美校を中退したが、翌1927年には、同期生とともに上社会を創立した。1929年光風会第4回展で光風賞、第10回帝展に《座像》を出品し特選となった。1933年第14回帝展でも《画室》により特選を受けた。1936年、帝展改組で誕生した新文展に反対し、小磯良平、脇田和らと新制作派協会を結成して主要作品を発表した。1938年に渡仏、第二次世界大戦勃発により1940年に帰国。滞仏中はニースにマチスを訪ねて指導を受けた。戦後は、新制作派協会を中心に、国内外の展覧会に作品を発表した。1955年渡米し、約20年間ニューヨークを拠点に制作、抽象画に独自の画風を切り開いた。戦前から版画に関心を示し、1932年の洋風版画会第3回展にエッチングなどを出品、その年日本版画協会会員に推挙されている。また1934年3月、版画荘を営む平井博の案内で、内田巖、脇田和らとともにワルワラ・ブブノワのアトリエを訪ね、ジंक版の石版画を試作した。その後1936年、第11回オリンピック芸術競技展(ベルリン/国内:東京府美術館)に版画を出品、造型版画協会第1回展(1937)、第2回展(1938)に賛助出品した。戦後も版画を多数制作。1991年に丸亀市猪熊弦一郎現代美術館が開館している。1993(平成5)年5月17日東京都で逝去。【文献】『生誕100周年記念猪熊弦一郎回顧展図録』(丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 2003) (滝沢)

井原 勇 (いはら・いさむ)

長野県須坂の小林朝治は1933年8月に平塚運一を講師に招き、同地での第1回版画講習会を開催する。その出席者を母体として信濃創作版画研究会が生まれ、版画誌『櫟』(1933～1937)が発行された。その第5輯(1935.4)に《賀状》が掲載される。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集』(須坂版画美術館 1999) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

井原 滝 (いはら・ひさし)

長野県須坂の小林朝治は1933年8月に平塚運一を講師として招き、同地での第1回版画講習会を開催する。その出席者を母体として信濃創作版画研究会が生まれ、版画誌『櫟』(1933-1937)が発行された。その第8輯(1935.12)に《収穫》、第9輯(1936.4)に《賀状》、第12輯(1937)に《賀状》を発表。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集』(須坂版画美術館 1999) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

伊吹廣洲 (いぶき・こうしゅう)

1937年、軍国画報社(発行人森川新蔵/東京市・大阪市・神戸市)より各3枚袋入りの木版画集『支那事変軍国画報』第一輯、第二輯(共に1937年9月20日発行)を刊行した。詳細は不明。(樋口)

今井次助 (いまい・じすけ)

長野県安曇野地方の版画誌『黄樹』会員(顧問は京都市の武田新太郎)。1937年当時は長野県北安曇野郡池田小学校勤務と思われる。但し版画掲載の有無は不明。【文献】『黄樹』1(黄樹社 1937.3) (樋口)

今井退蔵 (いまい・たいぞう)

1936年当時、神戸第一中学校の教員と思われる。『エッチング』45号(1936.7)に下阪の西田武雄と講習会の打ち合わせの記事。46号(1936.8)に「石版、エッチング、木版・其他」を寄稿。1941年3月、高羽敏の尽力で開かれた大阪エッチャー小集(大阪、寿司恵)に武藤完一、中井平三郎らと参加。西田式エッチングプレス所有者で、日本版画奉公会会員。1943年には神戸市灘区在住。【文献】『エッチング』45、46、123(1936.7・8、1943.4) / 武藤隼人「版画家・武藤完一資料集(戦前篇1) 一作家年譜を中心として」『東京学芸大学大学院教育研究科修士主論文』(2010) (樋口)

今井忠信 (いまい・ただのぶ)

川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校(現・宇都宮高等学校)在学中に、生徒が発行した版画誌『刀』に参加。第11輯(1931)に《ミコシ菊》、第12輯(1931)に《兎》、第13輯(1932)に《蜂》を発表する。【文献】『版画をつづる夢』図録(宇都宮美術館 2000) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

今井春雄 (いまい・はるお)

『エッチング』14号に銅版《〔高架下の風景〕》が掲載される。1933年当時、神戸御影師範4年生。翌1934年7月、兼行武四郎らによる西田武雄を講師に招いた御影師範学校講習会(28・29日)にも参加(当時同校5年生)。【文献】『エッチング』14、22(1933.12、1934.8) (樋口)

今井嘉幸 (いまい・かこう)

長野県須坂の小林朝治は1933年8月に平塚運一を講師として招き、同地での第1回版画講習会を開催する。その出席者を母体として信濃創作版画研究会が生まれ、版画誌『櫟』(1933～1937)が発行された。今井もその講習会に参加したと思われ、その第1輯(1933.8)に《菜園》が掲載されている。その後第2輯(1934)に《賀状》、第3輯(1934.7)に《エキスリプリス》、第7輯(1935.8)に《風景》を発表。その後1934年にも「版画及び図画講習会」(講師:平塚運一)が開かれたことを記念して『臥竜山風景版画集』(信濃創作版画研究会 1934)が刊行されたが、そこには《無題》が掲載されている。当時は上高井郡須坂小学校に勤務。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集』(須坂版画美術館 1999) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

今泉義夫 (いまいずみ・よしお)

東京に生まれる。東京高等工芸学校(現・千葉大学工学部)在学中、印刷工芸科の生徒が発行した版画同人誌

『刀画』に参加。第2号(1935.10)に《秋》を発表する。1937年、同校卒業後は内閣印刷局に勤務する。【文献】東京高等工芸学校一覧 昭和14年版(東京高等工芸学校1940)/『創作版画誌の系譜』(加治)

今村正雄(いまむら・まさお)

長崎の「詩と版画の会」によって発行された版画と文芸の同人誌『詩と版画』は第2輯から版画を重視して『版画長崎』(「版画長崎の会」発行)と改題された。その第3輯(1934.5)に《サーカス》《満州館》を発表するほか、カット(木版)も担当する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

伊葉道夫(いやく・みちお)

静岡の版画誌『ゆうかり』第1号(1931.1)に《あざみ》を発表する。静岡では1928年頃から版画仲間の交流がはじまり、小川龍彦、中村岳、栗山茂らが意気投合して1929年に童土社を立ち上げ、それぞれ発行していた版画誌を統合する形で『ゆうかり』(1931~1935)を発行する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

伊予田和夫(いよだ・かずお)

愛知県半田の教師仲間による版画団体「版刀会」が発行した版画誌『運』第5号[1931]に《[森と建物]》、第6号(1931)に《[蔵書票 チューリップ]》を発表。現在『運』は5~7.10号(1931-1935)のみを確認。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

入江義光(いりえ・よしみつ)

1943年日本版画奉公会新会員となり、版奉供出版画作品として木版画《浅草観音桜雨の図》を制作する。当時、東京市本所区在住。【文献】『エッチング』126、128(1943.7・9)(樋口)

入野豊(いりの・ゆたか)

1928(昭和3)年1月に開かれた日本創作版画協会第8回展に《おどり子》(版種不明)を出品。他に1914年の光風会第3回展に油彩画《習作》と水彩画《飛鳥山》《河入村の遠望》、1922年の平和記念東京博覧会に油彩画《ジュリア》を出品した。また、未見であるが『山田書店古書目録第11号』(1988.7)に『入野豊版画集』(「外国風景」、木版20枚、小山薫宛袋付、1929)が収録されている。【文献】『日本創作版画協会第八回展覧会目録』/『大正期美術展覧会目録』(東京文化財研究所 2002)(三木)

岩井尊人(いわい・たかひと) 1892~1940

1892(明治25)年奈良県に生まれる。実家は天理市内の病院「天理療院」。1917年に東京帝国大学法学部を卒業し、三井物産に勤める。1919年から1925年にロンドン駐在員となり、勤務の傍らサー・ジョージ・クラウセン(Sir George Clausen 1852~1944)、スタンリー・アンダーソン(Stanley Anderson 1884~1966)らに油彩画・銅版画を学び、その間、1923年には英国RBA(Royal Society of British Artists)会員となっている。1926年1月帰国。3月に三越で個展を開催し、油絵・水彩・パステル・エッチングなど滞欧作120点を展観。白日会員に推挙され、同年の白日会第3回展に自作の油彩画3点のほか、滞欧中に蒐集したペン画・水彩画・版画など約300点を特別陳列(現在、天理大学附属天理図書館に「岩井尊人コレクション」として収蔵)。翌年の第4回展(油

彩画2点)、1929年の第6回展(油彩画1点、水彩画2点、彫刻1点)にも出品した。1928年第9回展帝展に彫刻《アリス》が入選。翌1929年には帝展の中堅作家が集まって組織した第一美術協会の結成に参加するも、同会での活動は不明。1930年の第11回帝展には版画《猫》(エッチングか)を出品している。経済人としては、1935年には平生鈞三郎を团长とする日本政府派遣ブラジル経済使節団の一員として参加。当時の肩書きは、三井物産参事。また、広田弘毅内閣(1936~1937)の際には、平生鈞三郎文部大臣の秘書官を務めている。著書にロンドン駐在員時代の歌をまとめた『泰西游』(博文館 1927)、ブラジル訪問時に取材した『南米空の旅 画集』(第一書房1936)などがある。1940(昭和15)年12月18日東京都で逝去。【文献】正木直彦「岩井尊人君のこと」『国民美術』1-1(1923.12)/武藤好「岩井尊人蒐集版画素描コレクション 附 目録」『ビブリア』77(1981)/『日本美術年鑑 昭和41年版』(東京国立文化財研究所1967)(三木)

岩井藤吉(いわい・ふじきち)

1932(昭和7)年東京美術学校彫刻科木彫部に入学。校友会の活動として同年7月に校内で開かれた第14回版画部展覧会に出品。1937年同校卒業。1970年頃は横浜市に住む。【文献】伊藤伸子「東京美術学校校友会版画部 1928-1933」『日本近代の青春 創作版画の名品』図録(和歌山県立近代美術館・宇都宮美術館 2010)/『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』(ぎょうせい 1997)(三木)

岩尾篤一(いわお・とくいち)

大分県に生まれる。東京高等工芸学校(現・千葉大学工学部)在学中、印刷工芸科の生徒が発行した版画同人誌『刀画』に参加。第2号(1935.10)に《無題》を発表する。1938年に同校を卒業。【文献】『東京高等工芸学校一覧 昭和14年版』(東京高等工芸学校 1940)/『創作版画誌の系譜』(加治)

岩尾信夫(いわお・のぶお) 1908~1991

1908(明治41)年大分県に生まれる。1928年に大分県実業補習学校教員養成所を卒業し、大分県豊岡小学校、速見郡杵築小学校、大分国民学校などに勤務。この時期から版画をはじめ、武藤完一が大分で発行した版画誌『九州版画』第1号(1933.9)に《浜の風景》、第2号(1934.1)に《寝寐(いぬ)の図》、第4号(1934.7)に《白い花》、第6号(1935.1)に《乙亥賀春》、第9号(1936.1)に《丙子元旦》を発表する。この間、1934年8月に第6回図画講習会(主催：大分県師範学校)としての講師西田武雄によるエッチング講習会(『エッチング』22 1934.8)を受講。1936年8月には西田を囲んでのエッチング座談会(『エッチング』47 1936.9)に参加し、1937年8月に三度西田を講師に迎えての別府市教育会主催による講習会(『エッチング』58 1937.8)にも参加する。大分エッチング協会会員(『エッチング』47)。その後1942年に宮崎県に転居し、宮崎県師範学校教諭となり、1949年には宮崎大学学芸学部助教授。1968年に宮崎大学教育学部教授となり、1974年に退官。その間の1968年には宮崎県水彩画会を設立、また県造型教育研究会を設立して県内の小・中学校教諭のレベルアップに貢献し、1984年に宮崎市文化功労賞、1986年には地域文化功労賞の表彰を

受け、1989年宮崎県文化賞を受賞する。1991(平成3)年逝去。【文献】『宮崎県立美術館所蔵品目録』(1995)/池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1(2002)/『創作版画誌の系譜』(加治)

岩上行静(いわがみ・ぎょうせい)

長野県下の教師の集りであった下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』第1号(1934.9)に《舞妓》、第2号(1935)に《猪〔賀状〕》を発表。その後逝去したため第4号(1937.7)には遺作の作品《スキー》が掲載されている。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

岩上清三郎(いわがみ・せいざぶろう) 1902~1951

1902(明治35)年栃木県河内郡国本村(現・宇都宮市)宝木細谷に生まれる。川上澄生が1921年から英語教師として赴任していた宇都宮中学(現・宇都宮高等学校)を1922年に卒業し、栃木県師範学校第2部に入学する。翌1923年同校を卒業後(約一年間現役兵として)、歩兵第59連隊第1中隊に入隊。翌1924年には宇都宮の姿川尋常高等小学校に勤務し、同校教師であった池田信吾を知る。1925年には同校の教師たちが創刊した版画誌『村の版画』の創刊メンバーとして岩上も参加する。その第1号(1925.1)に《栃木山》、第2号(1925.2)に《村ノ一軒》と表紙絵、第3号(1925.4)に《学校》《剣片食》、第4号(1925.7)に《風景》、第5号(1925.9)に《はせを》第6号(1925.11)に《家》、第7号(1926.1)に《賀状》を発表する。池田の転勤により『村の版画』は休刊するが、1929年に再刊。第8号(1929.1)に《静物》《年賀状》、第9号(1929)に《風景》、第10巻〔通巻10号〕(1929.4)に《しばんだアネモネ》、第11巻〔通巻11号〕(1930.7)に《線路》と表紙絵《新緑》を発表。その後また、『村の版画』は休刊になるが、再度の再刊後(1932)に岩上の参加はなかった。その間の1925年頃からは教育現場において、授業の中で版画を指導するなど版画制作を教育課程に反映させ、その成果として児童作品を展示し、版画集を作成するなど、当時としては画期的な美術教育を行った。これは神戸版画の家が発行した『HANGA 児童作品集』(1925)の活動に影響を受けながら、全国に展開した児童自由画運動に沿うかたちで、図画教育の先駆けとなる授業を行ったことになる。戦後1951(昭和26)年には城山中央小学校校長に就任するも、同年急逝した。【文献】『版画をつづる夢』図録(宇都宮美術館2000)/『創作版画誌の系譜』(加治)

岩越二郎(いわこし・じろう) 生年不詳~1970

熊本県に生まれる。1913(大正2)年東京美術学校予備科に入学。1918年同校彫刻科塑像部を卒業。1923年に自作の「陶磁器創作木版画」頒布会(2月より1ヵ年、毎月2~3点を頒布、会費は月3円50銭)を起し、会員を募集(『詩と版画』第2輯(1923.3)による)。4月発行の『工藝通信』第2巻第4号に「陶磁器木版画に就いて」を寄稿。5月の日本創作版画協会第5回展に木版画《希臘古陶片口》を出品。7月発行の『詩と版画』第3輯に《陰刻壺》に寄せる。翌1924年に福島県白河中学校の教員になり(白河市歴史民俗資料館による)、同年12月の『HANGA』第4輯に《おおぼこ》、1925年12月の第5輯に《向日葵》(図版のみ)、1932年12月の『版藝術』第9号(「版画家年賀状百人集」)に年賀状を発表する一方、福島県下の遺跡・文化財の調査も手がけたと

いう。1970(昭和45)年2月14日福島県白河市で逝去。【文献】『第五回日本創作版画協会展覧会目録』/『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第二巻』(ぎょうせい1992)/『東京美術学校同窓会名簿』(1972)/『創作版画誌の系譜』(三木)

岩佐聖果(いわさ・せいか)

1922(大正11)年の日本創作版画協会第4回展に木版画《赤い着物を着た小供》を出品。目録の住所は東京。また、翌1923年の第4回中央美術展に日本画《工事中》を出品している。【文献】『第四回日本創作版画協会版画展覧会出品目録』/『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所2002)(三木)

岩崎勝太郎(いわさき・かつたろう) 1905~没年不詳

1905(明治38)年、長崎市立山町に生まれる。1924年長崎市立商業学校を卒業し、長崎市立高等商業学校(現・長崎大学)の事務員になり、1935年頃には会計主任であった(『版画長崎』5輯)。1939年に満州に渡り、1946年に引き揚げ、再び古巣の長崎大学経済学部に戻り、事務局長を最後に61歳で定年を迎えた。長崎高商時代は油絵を描いていたが、同窓生・田川憲の影響で版画を始め、1934年に田川が版画長崎の会を結成する時に岩崎も加わり、「田川のいるところ岩崎がいる」と言われるような関係で、長崎での創作版画運動の一翼を担った。版画長崎の会の前身、詩と版画の会にも参加しており、その同人誌『詩と版画』第1輯(1934.2)には《静物》《倉庫のある風景》《山間風景》ほか木版の目次カットを、改題して『版画長崎』となった第2輯(1934.4)には《風景》《静物》、第3輯(1934.5)には《新緑の頃》のほか木版の扉絵やカットを、第4輯(1934.11)には表紙を飾った《海と生物》ほか《生垣のある道》、第5輯(1935.8)には《妙相寺風景》《風景》を発表する。『版画長崎』は戦後も1963年まで刊行された。同人として名前は記載されているものの第6輯(1953.7)、最終号〔第7輯〕(1963.1)には岩崎の作品掲載はない。没年は不詳。戦前・戦後を通じて、長崎市桜馬町に在住。【文献】「平塚運一(1)(2)(3)」(阿野露団『長崎を描いた画家たち 上』明文社1988 48-60頁)/『創作版画誌の系譜』(加治)

岩崎秀夫(いわさき・ひでお)

川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校(現・宇都宮高等学校)4年、5年在学中、生徒が発行した版画集『刀 再版』に参加。その第1号〔1940〕に《スフィンクス》、第2号(1940.10)に《玄関》、第3号(1941)に《応接間》、第4号(1941)に《テラス》、第5号(1941)に《午睡》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

岩島 勉(いわじま・つとむ)

1932年の春陽会第10回展に木版画《広小路夜景》が初入選。1934年の第12回展にも《試作(光を泳ぐ)》が入選。空白期があり、1940年の日本版画協会第9回展に《武道の時間》が入選。以後、1943年の第12回展まで出品している。また、1942年には国会会展にも出品するようになり、同年の第17回展に《那智二の瀧》が入選。以後、1944年の第19回展まで出品した。なお、第17回展出品時の住所は、名古屋市昭和区荒田町3ノ18。また、平塚運一の編集した『昭和十七年版 きつつき版画集』の昭和17年版(1942.8)に《山峡の道》を、昭和

18年版(1943)に《天守閣》を発表している。戦後は、1947年に日本版画協会会員になり、1953年の第21回展出品目録まで名を連ねるも出品はなかった。最後の住所は三重県鈴鹿市一ノ宮町東中戸。【文献】『日本版画協会史 1931-2012』(日本版画協会 2012) / 『創作版画誌の系譜』(三木)

岩清水義見 (いわしみず・よしみ)

西田武雄発行の『エッチング』第26号(1934.12)に銅版画(題名不詳)を発表する。当時、東京府立女子師範の教諭として勤務。【文献】『エッチング』(加治)

岩田覚太郎 (いわた・かくたろう) 1902~1999

1902(明治35)年12月18日愛知県栗原郡木曾川町に生まれる。1922年東京美術学校日本画科予備科に入学。1927年同校卒業。引き続き研究科に進み、松岡映丘に師事。1928年第9回帝展に日本画が入選。1929年研究科修了。1931年に愛知県知多高等女学校(1938年半田高等女学校と改称)の図画科教諭となり、1973年まで半田高等学校、半田商業高等学校、名古屋芸術大学などで美術を教えた。版画は、1935年に近くの亀崎(会場:亀崎第一尋常小学校)で開かれた平塚運一の講習会に参加したことをきっかけに始め、講習会を主宰した大岩忠一の指導も受けたようだ。翌年11月の平塚による年賀状をテーマとした講習会(会場:亀崎第一尋常小学校)にも参加。参加者で「更閑会」という版画団体を結成し、1937年から1944年にかけて『賀状集』を刊行している(加藤祐子・調査による)。1937年日本版画協会第6回展に《果園の秋》が初入選。以後、1944年の第13回展まで連続して出品。1940年には会員に推挙されている。また、創作版画雑誌にも積極的に参加しているが、特に武藤完一の主宰する『九州版画』には1936年から参加し、第12号(1936.12)から第24号(終刊号 1941.12)まで連続して作品を発表。またその縁もあってか、1938年の岐阜中学での西田武雄・武藤完一・小野忠重らによるエッチングと木版画の講習会にも参加し、「受講後に」を『エッチング』第70号(1938.8)に寄稿している。また、長野県須坂で刊行された『櫟』第13号(1937.6)、釜山で刊行された『朱美之集』第1号から第4号(1940.5~1941.9)にも作品を発表している。戦後は、1949年の日本版画協会第17回展に会員として復帰。1985年に退会するまで同会を中心に作品を発表。また、国画会展にも1949年の第23回展から出品したほか、1953年には水彩協会(愛知)から招待を受け、翌年からは委員として木版画を出品。1961年からは木下富雄・佐藤宏・佃政道・鈴木賢二との「版画5人展」(会場:愛知県美術館)にも参加しているが、戦後の活動の全貌は掴めていない。1999年愛知県半田市で逝去。作品の多くは地元の半田市立博物館に収蔵されており、生前の1989年には「版画60年の回顧 岩田覚太郎展」が、1990年には東京美術学校の研究科時代に手がけた大和絵の模写を中心に「大和絵を今に 岩田覚太郎模写展」が開かれ、また没後の2009年には「館藏品展—岩田覚太郎版画展—」などが開かれている。【文献】『日本版画協会会報』35(1942.8) / 『自筆略歴』(日本版画協会蔵) / 『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』(ぎょうせい 1997) / 『愛知画家名鑑』(愛知画家顕彰会 1997) / 『版画60年の回顧 岩田覚太郎展』図録(半田市立博物館 1989) / 『大和絵を今に 岩田覚太郎模写展』図録(半田市立博物館

1990) / 加藤祐子「平塚運一による版画教育普及活動の一端:版画講習会開催とその余波—愛知県半田市亀崎を例に一」『版画家・平塚運一の世界展』図録(高浜市やきもの里かわら美術館 2003) / 『創作版画誌の系譜』(三木)

岩田専太郎 (いわた・せんたろう) 1901~1974

1901(明治34)年6月8日東京浅草黒船町に生まれる。父親が印刷業に失敗して京都に移住。専太郎も小学校を卒えた後は京都に移り住み、友禅図案、印刷図案などを学ぶ。1919年上京して伊東深木に師事。1920年博文館系の『講談雑誌』『文芸雑誌』を中心に挿絵を描く。関東大震災で大阪に移り、中山太陽堂がおこした出版社・プラトン社の専属画家として雑誌『苦楽』や『女性』、文芸物の挿絵などを手がける。その後雑誌や新聞などに活躍の場を広げ、1926年8月から1927年12月にかけて、大阪毎日新聞に連載された吉川英治『鳴門秘帖』の挿絵で人気画家となる。1954年菊池寛賞受賞。生前の版画刊行は僅かで、1927年《梅雨晴れ》(『婦人グラフ』第4巻第6号表紙絵)や1935年頃とされる《人妻瓜切りの図》(「春昼」のタイトルでも呼ばれる)の美人木版画、戦中に渡辺版画店から出された《高杉晋作》(未見)などがある。1974(昭和49)年2月19日逝去。2年後の1976年に『木版美人名作撰』と題する12枚の洋装・和装の美人を描いた木版画集が毎日新聞社から出版されている。なお、《人妻瓜切りの図》の制作年については、1935年頃作とされるが、1929年5月発行『柳屋』(第40号か)の「主情派現代風俗版画集 版行に就いて」(主情派美術刊行会)の予告広告で、第1回頒布作品となっていることから、実際の制作年は1930年頃ではないかと推測するが、詳細は不明。【文献】『柳屋』40か(柳屋画廊 1929.5) / 『近代日本版画大系 第3巻』(毎日新聞社 1976) / 『近代日本美人画展』(リッカー美術館 1982) / 『浮世絵大辞典』(東京堂出版 2008) (樋口)

岩田長次郎 (いわた・ちようじろう)

福岡県生まれか。号は祥光。1924(大正13)年東京美術学校彫刻木彫部選科に入学。校友会の活動として1928年2月に校内で開いた「椎之樹会」第1回創作版画展覧会に《雪の街》《夜のプラットホーム》《静物》を出品。また、同年秋の第9回帝展に彫刻が入選。翌1929年同校卒業。卒業後も第11・12・13回帝展(1930~1932)に連続して彫刻を出品した。当時の住所は東京。【文献】伊藤伸子「東京美術学校校友会版画部 1928-1933」『日本近代の青春 創作版画の名品』(和歌山県立近代美術館・宇都宮美術館 2010) / 『(東京美術学校)校友会月報』26-8(1928.3) / 『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇第三巻』(ぎょうせい 1997) / 『文展・帝展・新文展・日展 全出品目録 明治四十年—昭和三十二年』(ぎょうせい 1990) (三木)

岩田信義 (いわた・のぶよし)

川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校(現・宇都宮高等学校)に在学中、生徒が発行した版画誌『刀』の創刊(1928)から参加し、同校を1931年に卒業するまで版画を創り続ける。その第1輯(1928)に《熟れる秋》、第2輯(1928)に《古城》、第3輯(1928)に《戸祭ニテ》、第4輯(1929)に《旭台ヨリ》、第5輯(1929)に《コーヒー沸し》、第6輯(1929)に《思ヒ出》、第7

輯(1930)に《夜》、第8輯(1930)に《夏休み我想ふ》、第9輯(1930)の《ホームラン》を発表する。そのほか、『刀』のメンバー佐伯留守夫、安西七郎と岩田が中心となって発行した版画集『我等の版画』(刊行年不明)に《登山》を発表する。【文献】『版画をつづる夢』図録(宇都宮美術館 2000) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

岩田正己(いわた・まさみ) 1893～1988

1893(明治26)年8月11日新潟県三条市に生まれる。1918年東京美術学校日本画科卒。松岡映丘に師事。1921年、映丘門下の狩野光雅、遠藤教三、穴山勝堂の4人で「新興大和絵会」を結成(松岡映丘、川路柳虹が顧問)。更に山口蓬春、高木保之助、長谷川路可が加わる。1928年に松岡映丘と岩田正己ら7名(計8名)による木版画集『大和絵 日本八景』(大和絵版画刊行会、西村熊吉・摺)が刊行され、《木曾川》を制作。同会は1931年に解散するが、1930年、1934年と帝展で特選を重ね、以降は国画院会員、日本画院設立、日展参事などを経て、1977年芸術院会員。1988(昭和63)年3月9日逝去。【文献】『20世紀物故日本画事典』(美術年鑑社 1987)(樋口)

岩根豊秀(いわね・とよひで)

1906(明治39)年滋賀県に生まれる。本名は吉太郎(きちたろう)。青年団活動のなかで謄写版にふれたことがきっかけで、謄写版による版画制作に向かい、1930年に自宅で謄写印刷工房「サンライズスタジオ」を開く。日本謄写芸術院の講習会に参加して研鑽を積み、ポスターやパンフレットからラベルまで、モダンなデザインの印刷物を制作する一方、1935年には彦根で謄写美術研究会を創立した。戦後も印刷業を営みながら創作版画の制作に重点をおき、日本孔版作家協会展、日本版画協会展などに出品している。1981(昭和56)年逝去。【文献】社団法人日本軽印刷工業会大阪支部・大阪府軽印刷業協同組合『組合史』(1978) / 岩根順子『岩根豊秀の仕事場』(サンライズ出版株式会社 2007)(植野)

岩橋章山(いわはし・しょうざん) 1861～1944頃

1861(文久元)年3月11日鳥羽藩士・幕府軍艦操練所絵図方出役岩橋教章の長男として江戸に生まれる。幼名米太郎。1873年頃近藤真琴の経営する攻玉塾に入塾、父教章がウィーンからドイツ式銅・石版術を学んで帰国後、文会舎で父より彫版技術を教授さる。1883年内務省地理局雇となる傍ら、父の後を継ぎ銅版彫刻印刷所を麹町区永田町に開業す。教章の手掛けかけた『東京実測全図 5千分1』(内務省地理局 1887)の製版に関与する。1886年陸軍6等技手に任ぜられ参謀本部陸地測量部地図課に勤務し、1889年陸地測量部修技所助教を兼務する。翌年官を辞し民間の銅版印刷業に従事した後、1899年台湾総督府より巴里万国博覧会に関する事務嘱託を命ぜられ渡台。翌年台湾日々新報社に入社し、台湾で始めて銅・石版技術を開くと共に、現地人に技術を伝習する。1903年帰京し写真製版研究に従事した後、1906年再度台湾日々新報社に入社し、同地で始めて写真製版技術を開く。1910年2月8日父の遺稿集『正智遺稿』を私家版で刊行。1914年台湾日々新報社を辞し、台北府新起横町に台湾最初の写真製版所・岩橋写真製版所を開業するも、翌年長男に業を譲り帰京。帰京後は辻本写真工藝社に入社しグラビヤ銅凹版の研究に従事、1921年グラビヤ凹版を完成させる。1930年頃から晩年にかけて『印刷雑誌』や『エッ

チング』誌等で教章の事績や銅版技術について語り記す。1932年1月陶磁器用銅版研究のために名古屋に赴き5月に帰京。1934年には凸版印刷に入社している。1944(昭和19)年5月以前に逝去。【文献】角田拓朗『岩橋教章・章山関係資料の全容、及び新出資料について』(第12回版画史研究会 2013.7)(森登)

岩間睦夫(いわま・むつお)

長野県師範学校2部1年に在学中、生徒が発行した版画誌『樹氷』第2号皇紀2600年版(1940)に《無題》を発表する。ただし、落丁のため版画の確認できず。同校を1941年に卒業。『卒業生名簿 昭和25年』の刊行時点で死亡記事あり。【文献】『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950)(加治)

岩松 淳(いわまつ・あつし) 1908～1994

1908(明治41)年鹿児島県に生まれる。1927年に東京美術学校に入学したが1929年に退学。在学中の1928年、日本漫画家連盟に参加するとともに、岡本唐貴らの造型美術家協会に接近し、11月開催の第1回プロレタリア美術大展覧会に同協会所属作家として絵画7点を出品した。以後、最終開催となる1932年の第5回展まで、絵画や漫画作品の出品をつづけた。この間日本プロレタリア美術家同盟中央委員や『美術新聞』の編集長を務めるなど、プロ美運動に精力的に取り組んだ。その後『東京パック』などに漫画を寄稿、また1937年の一水会第1回展と翌1938年の第2回展に、妻の新井光子、大月源二、高森捷三ら、かつてのプロ美運動の仲間たちと出品した。1939年3月妻とともにアメリカに渡り、43年に矢島太郎の名で日本のファシズムを糾弾する“The New Sun”(『新しい太陽』)を出版した。戦後はアメリカで絵本作家として活躍した。版画作品に、プロ美運動での課題制作の可能性のある《カール・マルクスの肖像》が残されているが、ほかに見当たらないことから制作への関心は低かったと思われる。1994(平成6)年逝去。【文献】『前衛と反骨のダイナミズム 大正アヴァンギャルドからプロレタリア美術へ展図録』(市立小樽美術館、2000)(滝沢)

岩松多吉(いわまつ・たきち)

西田武雄発行の『エッチング』第11号(1933.9)に銅版画《[虫]》を発表する。当時、東京・京橋文海小学校の校長を務める。【文献】『エッチング』(加治)

岩本和子(いわもと・かずこ)

愛知高女在学中に、長野県須坂の信濃創作版画研究会が発行した版画誌『櫟』第13輯(1937.6)に《牛若丸》を発表。当時、愛知県知多高女の教諭であった岩田覚太郎に師事し、この作品も岩田から『櫟』で紹介したもの。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集』』(須坂版画美術館 1999) / 『創作版画誌の系譜』(加治)